

須多ヶ峯遺跡

SUDAGAMINE SITE

—県営ふるさと農道緊急整備事業に伴う発掘調査—

1995. 3

長野県飯山市教育委員会
長野県北信地方事務所

須多ヶ峯遺跡

SUDAGAMINE

SITE

— 県営ふるさと農道緊急整備事業に伴う発掘調査 —

1995. 3

長野県飯山市教育委員会
長野県北信地方事務所



発掘風景（縄文中期 7号竪穴住居址）



現地説明会風景（古墳時代 10号竪穴住居址説明）

序

飯山市は長野県の北部に位置し、多雪地帯ではありますが、古くからの遺跡が多く遺されています。

この度、県営ふるさと農場緊急整備事業に伴い須多ヶ峯遺跡の発掘調査を実施いたしました。

須多ヶ峯遺跡は昭和40年に県下で初めての方形周溝墓が発見されたことで著名であり、また発見された遺構が多くの関係者の努力によって保存されたことも、当時では遺跡保存の先駆的な試みとして知られています。現在は市の史跡として一帯を盛土し、公園として保護しております。

今回の調査地区は、方形周溝墓が発見された場所よりもはるかに高位の西側に広がる畑地一帯でありました。調査によって縄文時代中期及び古墳時代前期の住居跡や土器などが発見され、当地方の原始・古代史解明にとって欠かせない貴重な成果を挙げることができました。とくに、古墳時代前期の集落址から発見された土器は、北陸や東海地方との関連を有しており、北信濃地方の政治・文化の動向を探る上で極めて重要な意義を持つものであるとされています。

ここにその成果をまとめた報告書を刊行するにあたり、高橋桂調査団長・小林新治調査主任・桃井伊都子調査員をはじめとして、作業参加者や多くの関係諸氏・機関のご尽力に対して深甚なる感謝を申し上げます。

最後となりましたが、本書が考古学研究の発展と埋蔵文化財保護の理解に寄与することを祈念して序といたします。

平成7年3月

飯山市教育委員会
教育長 岩 崎 彌

目 次

序		
例言		
第1章 経 過		1
1 調査に至る経過	(望月 静雄)	1
2 調査経過	(小林 新治)	1
A 発掘調査		1
B 調査日誌抄		4
第2章 遺跡の概要		8
1 遺跡の位置と環境		8
A 地理的環境	(小林)	8
B 歴史的環境	(田村 澁城)	8
2 須多ヶ峯遺跡の過去の調査	(高橋 桂)	10
3 須多ヶ峯遺跡の概要	(小林)	13
第3章 縄文時代		23
1 遺構	(小林)	23
A 竪穴住居址		23
B 土坑		23
2 出土遺物		33
A 土器	(常盤井智行・黒岩 隆)	33
B 土製品		36
C 石器・石製品	(望月)	37
第4章 古墳時代		40
1 遺構	(小林)	40
A 竪穴住居址		40
B 掘立柱建物址		41
2 出土遺物		49
A 土器	(桃井伊都子 9のみ望月)	49
B 石製品	(小川ちか子)	59
第5章 まとめ	(高橋)	60

例 言

- 1 本書は、長野県飯山市大字旭須田ヶ峯31-1番地および大字飯山字大澤7563番地ほかに所在する須多ヶ峯遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、県宮ふるさと緊急整備事業にともない長野県北信地方事務所より依頼を受けた飯山市教育委員会が、平成6年8月1日より同年10月30日まで発掘調査を行った。
- 3 須多ヶ峯遺跡は、昭和40年7月（第1次調査）と12月（第2次調査）にそれぞれ発掘調査がなされている。また、昭和45年には工事と併行して遺物採集調査が行われており、これを第3次調査とする。したがって、須多ヶ峯遺跡の調査は今回の調査が第4次調査となる。各調査の概要は以下のとおりである。
第1次調査 弥生時代後期 方形周溝墓2基 勾玉・鉄剣
古墳時代前期 竪穴住居址1基（1号住居址）
第2次調査 古墳時代前期 竪穴住居址3基（2～4号住居址）
第3次調査 縄文時代中期 初頭～前葉土器
今回の調査では、古墳時代前期竪穴住居址4軒・掘立柱建物址1棟をはじめ縄文時代中期住居址・土坑等が発見された。
- 4 発掘調査は以下に掲げる組織で実施した。

飯山市遺跡調査会（平成6年度）

顧問	小山 邦武	市長
会長	滝沢藤三郎	教育委員会委員長
副会長	水野 光男	社会教育委員会長
委員	高橋 柱	文化財保護審議会長・日本考古学協会会員
	田中 広司	議会総務文教委員長（平成6年12月11日退任）
	藤巻 泰雄	議会総務文教委員長（平成6年12月12日就任）
	中村 敏	公民館長
	小川 幹夫	教育委員会委員長職務代理
	岩崎 彌	教育委員会教育長
事務局長	月岡 保男	教育委員会教育次長
事務局次長	町井 和夫	教育委員会社会教育係長
事務局員	川口 学実	

調査団

団長	高橋 桂	飯山北高等学校教諭
総括担当	望月 静雄	教育委員会事務局職員
調査員	小林 新治	
	桃井伊都子	
	田村 況城	
	常盤井智行	

作業参加者（順不同）

上野正一・岸田志づ子・岸田 昇・丸山十四・宮本鈴子・町井まつ・山崎けさお・上野貴美子・中島よつえ・高原弘一・高橋幸枝・高橋喜久治・小坂一葉・万場義秋・小出まさ子・清水準人・石沢悦次・竹内大五郎・北条辰男・小林経雄・樋山 巖・山崎満枝・田中朝治・月岡恵美・風巻泰助・高橋一二・渡辺金治・植中高見・市村ますみ・土屋久栄・竹井正光

奥山夕平・藤沢三也・阿部真也・八重田和志・清水敦哉（以上高校生）

整理作業参加者（順不同）

小林みさを・小川ちか子・藤沢和枝・川口学実

- 本書は、高橋桂調査団長の指導のもと調査員小林新治が主体となって行い、調査員全員が分担して作成した。遺構図版作成は主に小林、小川ちか子が、遺物図版作成は主に桃井伊都子・藤沢和枝が担当し、常盤井が補佐した。写真については、現場写真を小林新治が、遺物写真については田村況城が撮影した。なお、原稿執筆にあたっては分担し、目次に明記したが、編集責任は望月にある。
- 発掘調査から報告書作成にあたっては、次の方よりご指導をいただいた記して御礼申し上げます。また、黒岩隆氏には縄文土器について教示をいただいたあわせて御礼申し上げます。（順不同・敬称略）
桐原 健・赤塩 仁・黒岩 隆・福沢正美・米持元志・手塚三良・阿部 毅
飯山市公民館・飯山市柳原公民館・飯山市飯山公民館・藤ノ木区・市ノ口区・佃大島重機・市農林課・
助飯山市シルバー人材派遣センター
- 発掘調査に伴う図面・出土遺物等はすべて飯山市埋蔵文化財センターに保管している。
- 竪穴住居址については、第1・2次調査において1～4号住居址が発見されている。そのため今回の調査時において付番した1～6号住居址は、本報告書では以下のように改め以降正式名称とする。

第1・2次調査 1～4号竪穴住居址（変更なし）

4次調査（今回）	1号竪穴住居址→5号竪穴住居址	2号竪穴住居址→6号竪穴住居址
	3号竪穴住居址→7号竪穴住居址	4号竪穴住居址→8号竪穴住居址
	5号竪穴住居址→9号竪穴住居址	6号竪穴住居址→10号竪穴住居址

第 1 章 経 過

1 調査に至る経緯

平成5年5月、長野県北信地方事務所が計画した県営ふるさと農道緊急整備事業の実施にあたり、飯山市役所担当課である農林課より須多ヶ峯遺跡保護についての保護協議があった。市教育委員会では、当地方の重要遺跡である当該遺跡内への通過については極力避けるよう協力を依頼した。これを受けて、農林課でも遺跡地を通らないとの基本姿勢で、地元との協議の中でもいくつかのルートを設定して示した。しかしながら、同年8月頃までにルートの前後関係等で遺跡地内を通せざるを得ない状況となった。

市教育委員会では、こうした状況を受けて遺跡地内への通過はやむを得ないものと判断し、同年9月16日、県文化課・北信地方事務所・市農林課および市教委で現地協議を実施した。

須多ヶ峯遺跡は、昭和41年県営住宅団地造成中に弥生時代後期の方形周溝墓が発掘され、県下最初の方形周溝墓として注目を集めた遺跡である。今回の対象地は、その地点よりかなり高位で、現地での踏査では遺物はほとんど採集することはできなかった。しかし、かつて第3次調査で縄文中期土器を検出した地点に近く、加えて西側のグラウンド崖面において昭和46年頃には竪穴住居址の跡を確認していた。したがって、むしろ縄文時代の遺構があるのではないかと推測される場所であった。

現地協議の結果については、平成5年10月20日付けで県教育委員会教育長名で、

- 1 須多ヶ峯遺跡の保護については、工事に先立って発掘調査を実施して記録保存を図る。
- 2 発掘調査にかかる経費については、北信地方事務所が負担する。
- 3 発掘調査は、飯山市教育委員会に委託する。
- 4 調査時期については、飯山市教育委員会と北信地方事務所調整する。

と回答があり、計画書及び予算書が示された。

工事計画では二工区に分けて平成6年には南側の曙地区、平成7年に遺跡の所在する藤ノ木地区割が予定されていた。そのため、発掘調査は平成6年度中に終了する事とされ、他の調査や降雪時期を考慮して平成6年8月より10月までを予定することとした。

平成6年6月11日付けで法第57条による発掘通知が提出される。（9月9日付けで県より回答）

7月1日 法第98条による発掘通知を提出。

7月2日 市農林課と協議。8月1日を発掘開始の予定とすることで合意する。ただし、用地交渉が完了していないために、着手までに完了するよう依頼。

7月26日 地権者および藤ノ木区に発掘調査の説明会を開催。買取契約等がなされていない状況であったが、地権者の承諾をいただいて予定通り8月1日より実施することで合意された。同日、北信地方事務所長と発掘調査委託契約書を締結。

2 調査経過

A 発掘調査

このたびの緊急発掘調査対象地は、県の「ふるさと農道緊急整備事業」により、道路となる部分約4000㎡の調査を実施した。

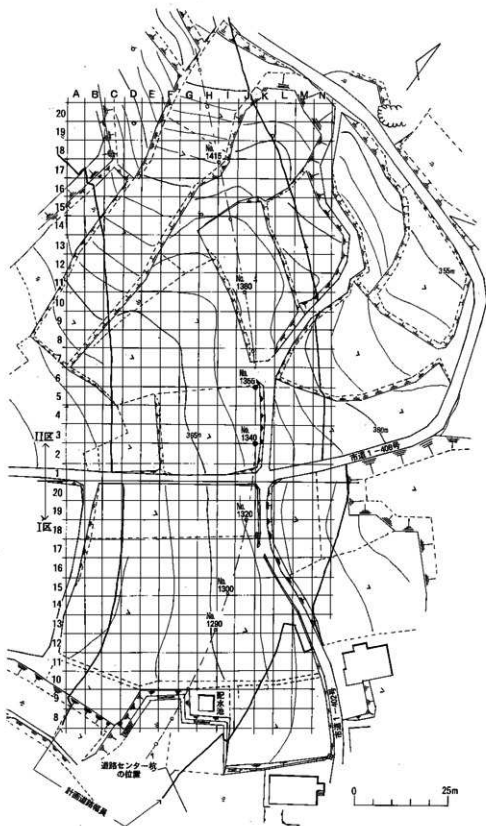


図1 地区割設定図 1:1,000

調査期間は、平成6年8月1日から10月30日までの約3ヵ月間実施した。この間、記録的な猛暑・異常乾燥と土ぼこりに悩まされながらの調査であり、また、散水作業を並用しなければならない調査でもあった。なお、調査区内の道路部分と栗・柿のあるところ（西端部）は、諸事情により、調査できなかった。

地区割は、道路中心杭No1340とNo1355とを直線に結んだ線を基準とし、各グリッドは5m方眼で設定した。なお、調査区の中心を市道1-408号線が南北に走っているため、便宜上この市道の東側をⅠ区、西側をⅡ区とした。番号は、南北にA～N（Ⅰ・Ⅱ区とも同じ。）とし、東西にはⅠ区・Ⅱ区別に1～20とした（図1）。したがって、現地での各グリッドの呼称は、ⅠA-1のように用いた。

なお、遺物の注記にはSDM（須多ヶ峯遺跡）94（西暦）Ⅰ（大区）A-1（グリッド）-1（遺物番号）のように記した。

また、標高は市農林課より示された道路中心杭頭の数値を基準とした。基準数値は次のとおりである。（中心杭の位置は図1参照）

中心杭No	杭頭標高	中心杭No	杭頭標高
1290	365.08m	1340	363.803m
1300	364.693	1380	363.048
1320	364.039	1415	359.169

調査方法は、原則として表土剥ぎ、精査、遺構確認、遺構確認状態写真撮影、遺構掘り、遺物出土状態写真撮影、遺物測量、遺物の取りあげ、完掘状態写真撮影、遺構平板実測の順で行なった。表土（耕作土）は重機で除去し、精査はジョレンがけを主体に行ない、遺物のあるところは移植ゴテで行なった。写真撮影は、白黒フィルム35ミリとカラースライド35ミリフィルムで適時撮影した。遺構掘り下げは移植ゴテで慎重に行ない、適時セクション帯を残す等土層観察に努めた。測量は、遺構全体図は40分の1で作成、また、住居址等主要遺構は20分の1もしくは10分の1の図を作成した。出土遺物については、10分の1または20分の1の分布図・微細図を適時作成した。大半は平板測量で実施した。

遺物の取り上げは、遺構毎、またはグリッド毎に地点・レベルを測り取り上げた。攪乱によるグリッド毎にとりあげた出土遺物は僅かであった。

遺構の略称は、竪穴住居址にSⅠを、掘立柱建物址にSBを、土坑をSKを用いた。番号は1から付番したが、今報告では住居址については過去の調査で4軒検出されているため「5」からとした。対照表については例言に記してある。

この調査で検出された主な遺構は、次のとおりである。

縄文時代 竪穴住居址 2軒 土坑 17基

古墳時代 竪穴住居址 4軒 掘立柱建物址 2棟

この遺跡の基本的な層序は、畑地であったため上位から耕作土（黒灰色土厚約30cm）、黄褐色土（約20cm）、黄灰色土（約50cm）、黄灰色粘質土（約15cm）となっていて、次の黄白色粘質土（約15cm）は調査できた範囲にとどめた（図2）。

なお、第1土器集中地点（Ⅰ区Ⅰ・J-18・19）と第2土器集



図2 土層模式図（1：20）

地点(Ⅱ区L・M-6・7)は、小さな谷で黒色土が厚くトレンチを入れたが、遺構は検出されなかった。また、西側の大きな谷のⅡ区D~F-11~18)も黒色土が厚く(図1)遺構は認められなかった。遺構は表土(耕作土)除去後の地表面からと、それより15cmほどの下層の黒色土中からの出土遺物が認められたがその下には含まれていなかった。

B 調査日誌抄

平成6年

7月26日(火) 市農林課と現地確認。コンテナハウスの設置場所、土置場等の検討。藤ノ木公民館において地元説明会を開催。

7月29日(金)~8月1日(月)Ⅰ区(市道1-408号線の北側)内の重機による表土剥ぎ。約30cmの表土を取除くと黄褐色土。散水作業。

7月29日(金) コンテナハウス設置、テント設置、器材搬入。

8月1日(月) 発掘調査開始式。Ⅰ区の基準杭、グリッド杭(以下「G杭」という)打ち開始。Ⅰ区西半分の南端からジョレンがけ精査開始。散水作業続行。

8月2日(火) Ⅰ区内の基準杭、G杭打ち完了。表示板設置完了。C~F-14~20のジョレンがけ精査続行。F-16~17で堅穴住居址(古墳時代)1軒(SI5)検出。

8月3日(水) A~G-10~15のジョレンがけ精査。各グリッド毎の遺物はほとんどない。C・D-14で土坑検出(SK1)。全体に耕作機械で黄褐色土が削られている。10~14ラインが特にひどく、南から北に向け幅70~80cmの帯状に約15cmの深さで攪乱されている。

8月4日(木) A~G-8~15ジョレンがけ精査。B-10で土坑(SK2)を検出。

8月5日(金)~8月8日(月)Ⅰ区(市道1-408号線の西側)の重機による表土剥ぎ(日曜日を除く)。

8月5日(金) Ⅰ区A~E-9~13ジョレンがけ精査。E-13で土坑(SK3)検出。

8月7日(日) 柳原公民館主催の発掘体験学習(H~J-12~16の範囲)が開催され50名参加。

8月8日(月) A~G-8~13ジョレンがけ精査続行遺構掘り開始。C-8で土坑2基、B-8で1基検出。



ほこりじめしのための散水作業
また、遺構面への散水も行った。



ひどい攪乱の中に落とし穴が並んでいた



9月29日の現地見学会風景（後方は復元家屋）

8月22日（月） S I 5・6セクション帯を残し掘り下げ開始。K 1・3完掘、坑底に小穴あり。写真撮影。SK 4～6半割掘り。B・C-8・9の長方形土坑、木棺墓木口痕に思われたが、半割の結果落し穴らしいので、C-8の土坑をSK 7・8に、B-9をSK 9とした。I・J-18土器片集中箇所が住居址と思われたが、黒色土厚くプラン不明確。土層観察用トレンチを入れる。K-14・15で土坑（SK 10）検出。

8月23日（火） S I 5・6掘り下げ続行。SK 4～6土層実測（10分の1図作成）。

8月24日（水） ジョレンがけ精査続行。SK 8～10土層実測。S I 6遺物分布状態写真、出土状態実測開始（10分の1図）。SK 4～10掘り下げ、うちSK 4～7完掘・坑底に小穴あり。

8月25日（木） S I 5遺物分布状態写真、分布状態の平板測量（20分の1図）、遺物とりあげ。SK 8・9完掘、坑底に小穴あり。精査続行。2区基準、G杭打ち。

8月26日（金） S I 6遺物分布状態実測完了、遺物とりあげ。SK 2・5～7完掘状態実測（20分の1図）。遺構平面測量（全体）。II区表示板設置。

8月29日（月） S I 5完掘写真、平面測量。S I 6セクション帯土層図作成。SK 5完掘写真。遺構平面測量（全体）続行。II区ジョレンがけ精査F～K-1～5ラインから開始。

8月30日（火） F-5土坑（SK 11）、H-4土坑（SK 12）をそれぞれ検出、上面輪郭写真。

8月31日（水） J-4土坑（SK 13）、J-3土坑（SK 14）を検出、上面輪郭写真。I区のS I 6写真。SK 11～14掘り下げ。

8月9日（火） E～L-10～14ジョレンがけ精査。F-11～14（SK 4）とH-10（SK 5）で土坑各1基検出。

8月10日（水） G～K-10～19ジョレンがけ精査。G-11で土坑（SK 6）検出。SK 4～6上面輪郭写真。

8月11日（木） ジョレンがけ精査続行。I・J-18で土器片集中出土。住居址？

8月19日（金） G～K-16～20ジョレンがけ精査続行。I・J-15～16で竪穴住居址（S I 2・古墳）。S I 6上面輪郭写真。



杭打ち作業

9月2日(金)～3日(土) 重機による表土剥ぎ(Ⅱ区)。

9月2日(金) SK7～9(I区)及びSK11・14(Ⅱ区)の発掘写真。SK12・13発掘ジョレンかけ精査続行。

9月5日(月) Ⅱ区内基準・G杭打ち、表示板設置。SK12・13発掘、実測・写真。

9月6日(火) Ⅱ区内重機による表土剥ぎ、土ぼこりすく散水車2台。E-5で土坑(SK15)検出及び上面輪郭写真。C～F-6～7

で住居址様の長方形プラン検出、とりあえずSI7とした。北側と西側は不明確、耕作機械の攪乱によるものと思われる。C～E-14～15にかけてトレンチ入れる。此所一帯は、沢すじで黒色土厚い。I区内の測量(レベル含む)完了。

9月7日(水) H～J-7～9で竪穴住居址(SI8・古墳)検出。SI7・8上面輪郭写真。SI7・8及びSK15・16セクション帯を残して掘り下げ。SK16から凹石1点出土。

9月8日(木) SI7縄文中期土器片散在的に出土。さらに石鏃1、石斧1出土、北側で焼土確認。

9月12日(月) SI7南西の壁付近で深鉢1個体出土、黄色粘質土になる。SI8掘り下げ続行、黒色土厚く南側の支柱穴未確認。

9月14日(水) 中野実高黒岩・赤垣両先生来訪指導をうける。SI7深鉢出土状態写真撮影、実測。SI8南側の支柱穴確認。

9月16日(金) SI7遺物分布状態写真、分布図作成。SI8遺物出土状態写真。SK15・16発掘写真と実測。精査続行。

9月19日(月) J・K-9・10で掘立柱建物址(SB1)検出。SI7遺物とりあげ。

9月21日(水) J～N-10～16平板による遺構平面測量(全体)。L-13・14掘立柱建物址(SB2)検出。

9月29日(木) 午前古墳時代住居復元完了(I区の6号住居址を復元)。午後市教委並びに飯山・柳原公民館共催の現地見学会開催、約80名参加。

9月30日(金) G-6・7で竪穴住居址(SI9)検出及び遺構平面測量。プランの大部分が攪乱。

10月3日(月) SI8南壁西寄りの床面で小砂利を敷きつめたと思われる箇所出土。



今日も暑い 炎天下で作業が続く



測量作業

- 10月4日(火) S I 8 南壁東隅で壺の口縁部出土。
- 10月7日(金) S I 7 南端部でミニチュア土製品1点出土、同出土状態写真。L-10・11で竪穴住居址(S I 10)検出。
- 10月12日(水) S I 10 上面輪郭部写真、確認面掘り下げ。
- 10月14日(金) S I 7・8・10 他の掘り作業続行。S I 10 南端部で石礫1点検出。レベル測定続行。
- 10月17日(月) I 区基準・G杭撤収。S I 10 遺物とりあげ。遺構平面測量等続行。
- 10月19日(水) S I 8・10 遺物とりあげ完了。柳原保育園の園児40名見学。
- 10月20日(木) 撤収作業(器材運搬等)。一部の測量・撤収作業を残してすべて終了する。
- 10月21日～31日 この間残務整理(測量・器材撤収等)を行なった。

第2章 遺跡の概要

1 遺跡の位置と環境

A 地理的環境

須多ヶ峯遺跡は、長野県飯山市大字旭字須田ヶ峯31-1等に所在する(図3)。

飯山盆地を南から北東へ流れ下る千曲川の左岸側には、比較的緩やかな地形が発達する。千曲川沿いの低地から西側へ行くにつれて扇状地から丘陵、さらに台地から関田山地へと移り、斑尾山(1,381.8m)へと連続し、関田山地に聳える鍋倉山(1,288.8m)黒岩山(938.6m)などが飯山盆地の西側に連なり、市街地があり、市街地端部の西側丘陵上に須多ヶ峯遺跡が在る。

この丘陵は、北に向かってゆるやかに傾斜し、台地状になっていて北東部が急崖となって市街地北端部と外様平南端部に接している。丘陵上からの眺望がすばらしく、関田山地の峯々・外様平の穀倉地帯・弥生時代遺跡で著名な長峰丘陵と千曲川の悠々の流れを一望できる。眼下には、その昔越後との交易通である富倉街道(現国道292号線)が西へ延び高田・直江津方面へ通じ、越後の海産物が飯山へと運ばれた重要な街道であった。このような交易道が関田山地には数多く残っている。

現在、丘陵の大部分がアスパラ畑で耕作され深耕ロータリーと思われる機械で傷ついた遺跡、また、昭和40(1965)年の発掘調査で「良好な遺跡」と確認された遺跡だが、道路建設によりその一部を失うこととなった。

引用・参考文献

飯山市誌 自然環境編(1991) 飯山市・飯山市誌編纂委員会

B 歴史的環境

須多ヶ峯遺跡は長峰丘陵と関田山脈に挟まれた外様平の南端に位置する旭藤ノ木須多ヶ峯地籍にある。ここでは遺跡周辺の歴史的環境を考古学的遺跡をもとに述べることにする。(図4)

旧石器時代 須多ヶ峯遺跡周辺には長峰丘陵上の東原寺・針湖池・長峰等の旧石器の遺跡があり、刃器や彫器などの石器がみついている。

縄文時代 周辺で最も古い縄文時代の遺跡は小佐原遺跡で、縄文時代草創期から早期の表裏縄文土器や石器が出土している。十三ヶ丘・針湖池遺跡でもやはり表裏縄文土器が採集されている。縄文時代前期には有尾・小佐原・須多ヶ峯・長者窪・直板遺跡等がある。有尾遺跡は有尾式土器の標式遺跡である。

縄文時代中期は北飯山・島・笹川・別府原遺跡など、関田山脈東麓に点々と遺跡が見られる。その他お茶屋・ガニ沢上・飯山ジャンツェ下遺跡からも縄文土器が採集されている。

以上、縄文時代について簡単に触れてきたが、周辺には縄文時代の遺跡はいたって少ない。

弥生時代 外様平は飯山でも最も早く稲作が始められたところで、須多ヶ峯・鍛冶田・北原・西長峰・法寺遺跡など関田山脈や長峰丘陵上に数多くの遺跡が点在している。

弥生時代後期に入り、先の柳原鍛冶田・北原遺跡など関田山脈東麓の遺跡が姿を消すのに代わって、西長峰・東長峰・鬼が峰・小佐原・お茶屋・長者窪遺跡など長峰丘陵を中心に新たに遺跡が出現する。須多ヶ峯遺跡では昭和40年の発掘調査によって県下初の方形周溝墓が検出されている。山麓の湧水に恵まれた場所から低湿地に接した丘陵へと生活の拠点が移動したことがうかがえる。このことは狩猟・採集を中心

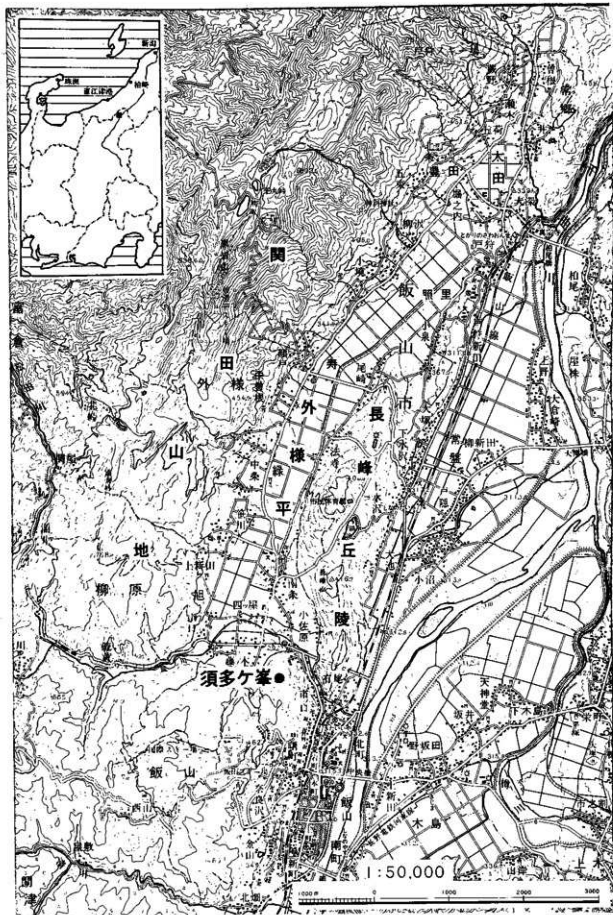


図3 須多ヶ峯遺跡の位置

とした生活からいよいよ稲作を中心とした農耕生活へと変わって行く生活文化の変遷として受け取ることができであろう。

古墳時代 長峰丘陵は飯山でも有数の古墳密集地である。近年前方後方墳と推定されている有尾古墳のほか、円墳の大池古墳群などが知られている。しかし、弥生時代に比べて古墳時代の生活跡はいたって少なく須多ヶ峯遺跡において堅穴住居跡が発見された以外、別府原・須多ヶ峯・林子畑・有尾・雨池北遺跡で僅かに土師器が発見されているにすぎない。

歴史時代 古墳時代以降を歴史時代と総称しておく。

飯山地方では今のところ奈良時代の遺跡は知られていない。平安時代の遺跡としては針湖池・布施田神・別府原・正行寺北・鬼ヶ峯・長者窪・林子畑・有尾・城山・十三ヶ丘・北原・鍛冶田・遺跡があり、北原では多くの鍛冶遺構が発見されている。小佐原遺跡では土壌墓が発見され、灰軸陶器の長頸瓶や土師器の環が出土している。

中世・近世 中世の代表的集落としては鍛冶田・有尾遺跡などがあり、掘立柱建物跡・井戸址や珠洲系陶器、中国銭、中国製陶磁器などが出土している。

また、関田山脈東麓には山口城・馬の峰城、中条館、中条城などの中世城館跡が点々と存在している。

以上、簡単に歴史的環境について記してきたが、旧石器時代・縄文時代においては千曲川が大きな役割を果たし、川の恵みを中心とした狩猟・採集生活をし、弥生時代では農耕と関連して沖積地を望む地帯を生活の場所として選択し、平安時代以降は次第に開拓の鎌が進められて、前の時代には不利益とされていた地域にも生活の痕跡を刻むようになったものと考えられよう。

引用・参考文献

飯山の遺跡 (1986) 飯山市教育委員会

飯山市誌 自然環境編 (1991) 飯山市・飯山市教育委員会

2 須多ヶ峯遺跡の研究と過去の調査

「信濃史料第一巻上」の地名表によれば、須多ヶ峯台地及び台地周辺の遺跡として、「市の口ガニ沢上」が記載されている。ガニ沢とは須多ヶ峯台地の東端に湧出する泉が小河川となって台地の東端を東北方に流れている沢である。このガニ沢の上となっていて、地形が台地となっているから須多ヶ峯台地をさし示しているものとみて間違いないであろう。ここでは、弥生時代の箱清水式土器片が神田正人氏によって採集されており、須多ヶ峯台地は弥生式後期の遺跡とされていたことが判る。

昭和40年、台地が東北方に傾斜する地帯を階段状に地均し、住宅団地を造成することが決定し、第1期の造成工事が同年7月より開始された。昭和40年7月下旬、飯山北高等学校地歴部が、夏休みを利用して縄文中期の土偶を多量に出土することで知られる秋津地区深沢遺跡第3次発掘調査を永峯光一、野口義磨両氏を指導者として行っていた。この調査期間中に、須多ヶ峯から多量の弥生式土器が出土しているとの報がもたらされたのである。そこで、発掘調査に参加していた国学院大学生の小林重義、木村幾太郎両氏に須多ヶ峯台地の調査に赴いてもらった。夕方、帰ってきた両氏によれば、当時学界で注目されつつあった方形周溝墓と思われるとのことであった。これは大変だという訳で、深沢遺跡調査の終了をまって直ちに須多ヶ峯遺跡の調査を7月末より8月初旬にかけて行なった。これが須多ヶ峯遺跡の第一次調査である。小林、木村両氏には帰京を延期してもらい調査の中心となっていた。調査の結果、2基の方形周溝墓が発見された。1号周溝墓主体部より硬玉製大形勾玉、鉄剣、溝内より弥生後期の壺、甕、器台等が発

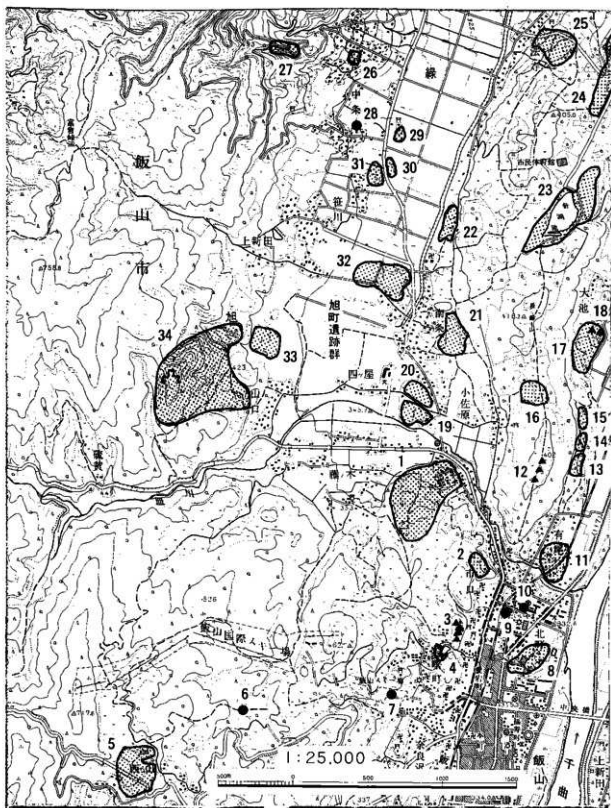
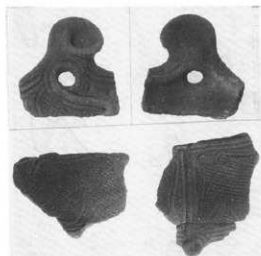


図4 周辺の遺跡分布図

1. 須多ヶ峯 2. ガニ沢上 3. 神明町1~4号 4. 雨池北 5. 十三ヶ丘 6. 直坂
7. 飯山シャンツェ下 8. 城山 9. 北飯山 10. 北町 11. 有尾1~3号墳 13. 黄金石上
14. 林子畑 15. 長者窪 16. 長峰 17. お茶屋 18. 大池1~2号墳 19. 小佐原 20. 鬼ヶ峰
21. 東源寺 22. 正行寺北 23. 針尾池 24. 西長峰 25. 法寺 26. 中象館 27. 馬の峯城 28. 鳥
29. 布施田神社 30. 笹川 31. 別府原 32. 北原 33. 飯治田(32・33は旭町遺跡群) 34. 山口城

見された。また、方形周溝墓の周辺より縄文前期土器破片が比較的多量に発見された。更に、周溝墓の北西側で不完全ではあったが古墳時代前期の住居址が1軒発見された。



出土した縄文時代中期土器



方形周溝墓(上)と出土した鉄釘(右)



終了間近となり、調査体制を組むことは不可能であった。そこでブルドーザーの動きまわる中、懸命に出土している土器破片を採集してまわったのである。この地帯が、発掘調査されていたならば、当地方における縄文中期初頭の住居址をはじめ各種の遺構が発見されたことであろう。返すがえすも残念なことである。

昭和45年には、縄文中期初頭の土器破片が多量に出土した地帯上方で、地均し工事が行なわれた。この折りにも炉址と思われる焼土が発見されており、調査が行なわれたならば必ずや住居址が発見されたことであろう。昭和40年代では、埋蔵文化財に対する認識が一般的に薄く、無残に破壊されていった遺跡が数多く存在したのである。

参考・引用文献

高橋 柱・太田文雄 『北信濃須々峯遺跡第2次発掘調査報告書』 1977 「信濃」第29巻第4号

2基の方形周溝墓は長野県内では最初の発見であった。周溝墓発見の地帯は、調査終了後直ちに地均し工事が行なわれる予定であったが、あまりにも重要な発見であり、近隣して同様の遺構の存在が予測されたため周溝墓発見地周辺の工事延期を工事主体者である市当局に要望し、幸いにも了承を得ることができた。同年12月初旬から中旬にかけて、桐原健氏に参加して頂き第2次調査を実施した。方形周溝墓の発見はなかったが、古墳時代前期の住居址を2軒発見した。うち1軒は、折からの猛烈な降雪に見舞われ完掘出来ず、翌年の4月末に雪消えを待ってようやく終了した。

周溝墓、住居址の発見地帯は、調査の終了を待って住宅が建設される予定であったが、発見された遺構、遺物がありにも重要であるとの見地から保存することが望ましいとの声が高まり、当時県社会教育指導主事林茂樹氏の多大な骨折りと市当局の理解により、若干土盛りをして広場として保存することが決定し、現在にいたっている。

昭和41年7月第一次調査地帯の上方で、第二期の住宅団地造成のための地均し工事が、行なわれた。この折り、多量の縄文中期初頭の土器破片が出土しているとの噂をきき、直ちにかけつけたが工事は

3 須多ヶ峯遺跡の概要

飯山市街地の西側を斑尾山麓に発達した丘陵が、国道292号線の南側までのびている。

この丘陵の北端を古くより「須多峯」と呼ばれアスパラ畑が南へと広がっているが、ここが須多ヶ峯遺跡で丘陵全体が範囲である。

全体に北方向への傾斜地で、扇状に東西への広がりをみせ、東と西に大きな沢（谷）があり、その間にも小さな沢が見られる。北端は急崖となっていて、この部分に住宅団地造成が行なわれ今の須多ヶ峯団地となっている。前回の発掘調査地等は、図5のa～dの場所であり、今回はその西側上方のe地点である（図5）。

今回の発掘では古墳時代の竪穴住居址が4軒検出され、前回と合せて8軒が確認された（表1参照）。また、この時代の掘立柱建物1棟が、8号住居址と10号住居址の間で検出されている。

表1 須多ヶ峯遺跡古墳時代住居址一覧表

	番号	長径 × 短径 m	面積 (㎡) (坪)	備 考
第一次 第三次	1号	4.5 × 4.0	18 ≒ 5.5	一部攪乱・隅丸方形
	2号	5.3 × 5.2	27.6 ≒ 8.5	隅丸方形（不整形）
	3号	6.4 × 5.9	37.8 ≒ 11.5	隅丸方形
	4号			すでに破壊され不明、炉確認
第四次 (今回)	5号	7.0 × 7.0	49.0 ≒ 15.0	方形
	6号	4.0 × 4.0	16.0 ≒ 5.0	隅丸方形
	8号	7.8 × 6.9	54.0 ≒ 16.0	隅丸長方形
	10号	6.6 × 6.2	40.0 ≒ 12.0	隅丸方形
計	8	軒		

縄文時代では今回竪穴住居址が2棟検出され、この時代の落とし穴と思われる土坑も検出されている。遺物については縄文時代中期土器や古墳時代前期の土師器が、9号竪穴住居址を除く竪穴住居址から出土している。

第1次調査において弥生時代後期方形溝墓も発見されているので、以上のことから縄文時代中期（約5000年前）の集落址と弥生時代後期後半から古墳時代前期（約1700年前）の集落址があったことが判明し、それぞれの文化動向を知る上で貴重な資料を提供している。

そして、前項でふれられているように、貴重な須多ヶ峯遺跡が今またその姿の一部が失われることとなった。

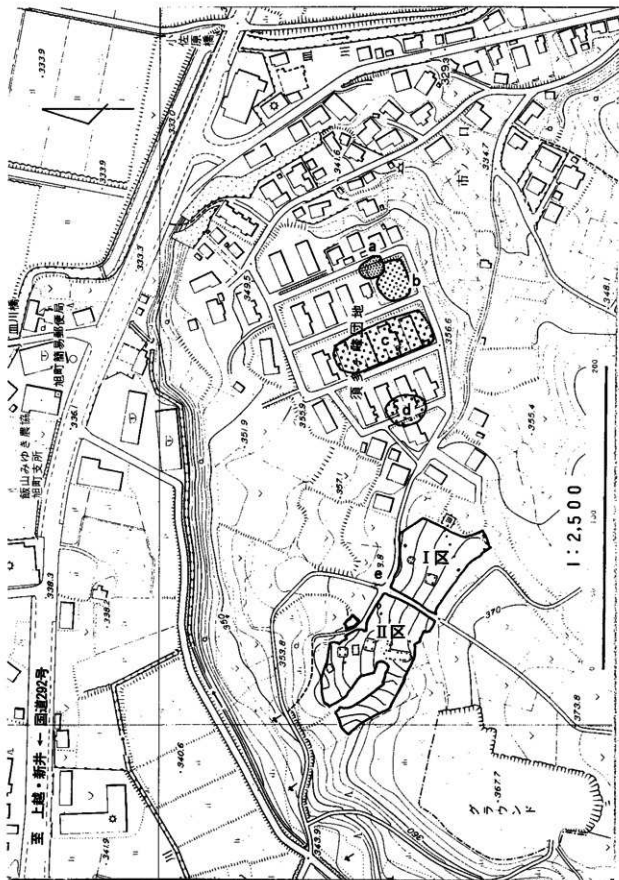


図5 調査地周辺の地形 1:2500

- a 第1次調査地(昭40.7)
- b 第2次調査地(昭40.12)
- c 縄文時代中期(初頭)土器出土地(昭41.7第2期宅遺跡)
- d 4号住居址発見地(古墳時代・昭40.12)
- e 今回の調査地(1994)

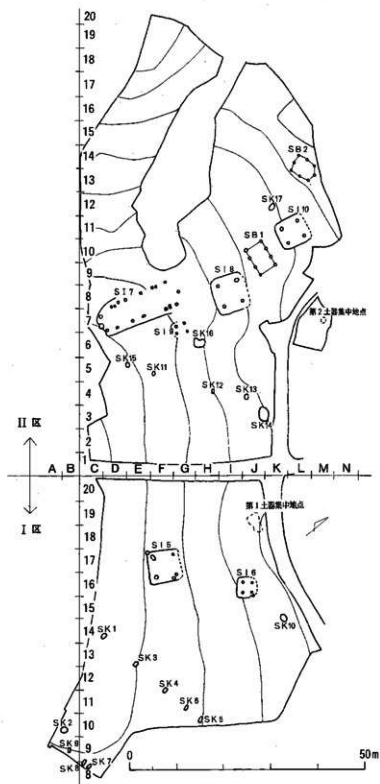


图6 調査地全体図 1:800

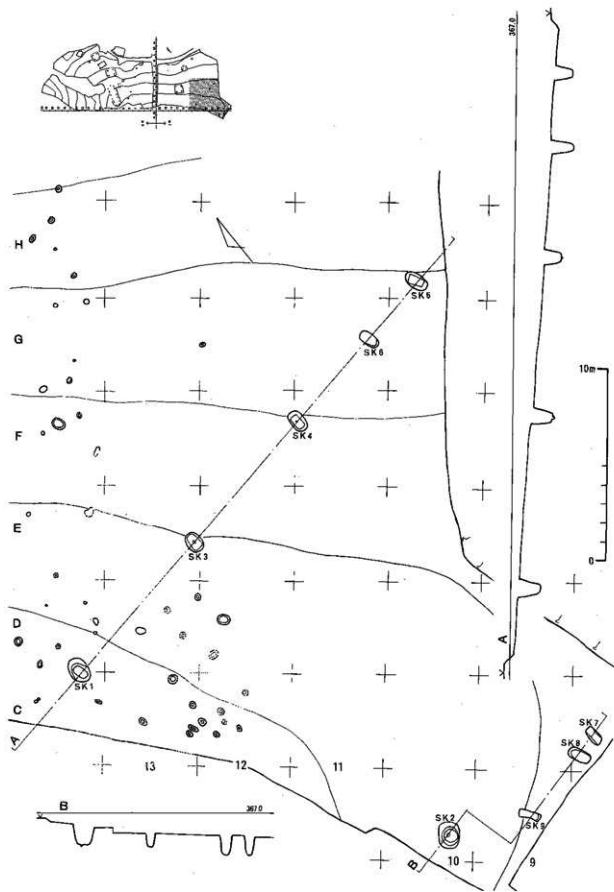


图7 I区遗构实测图 1:200

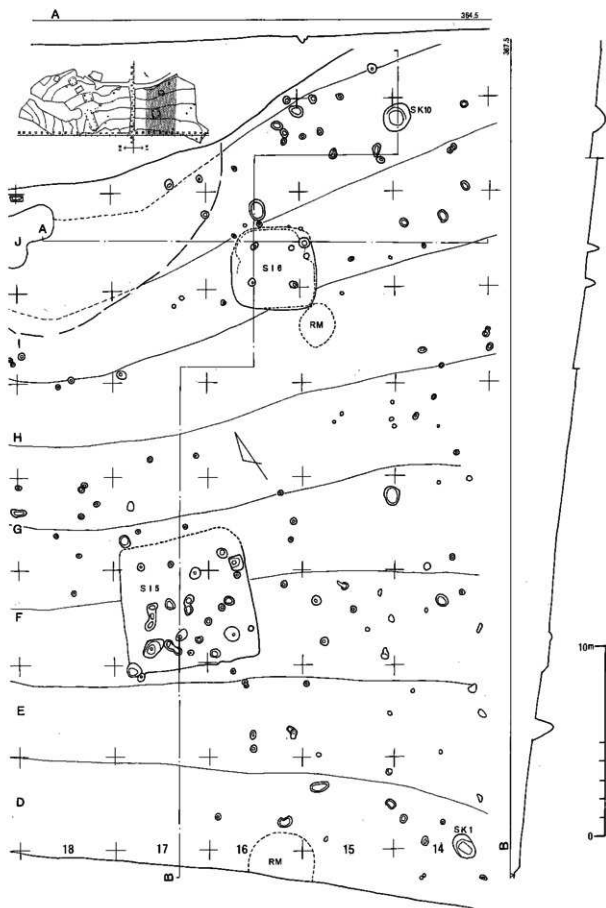


图8 I区遺構実測図 1:200

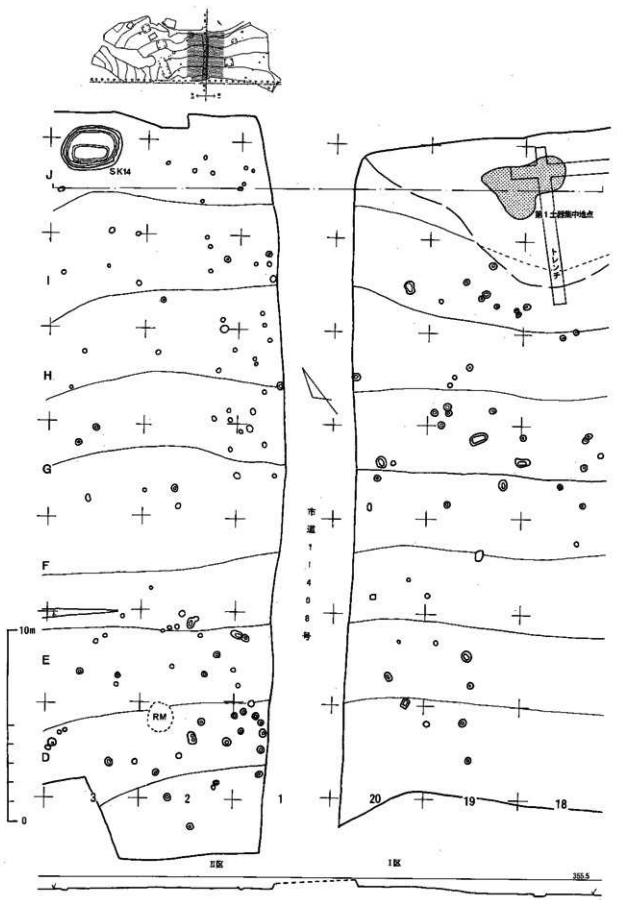


图9 I·II区遺構実測図 1:200

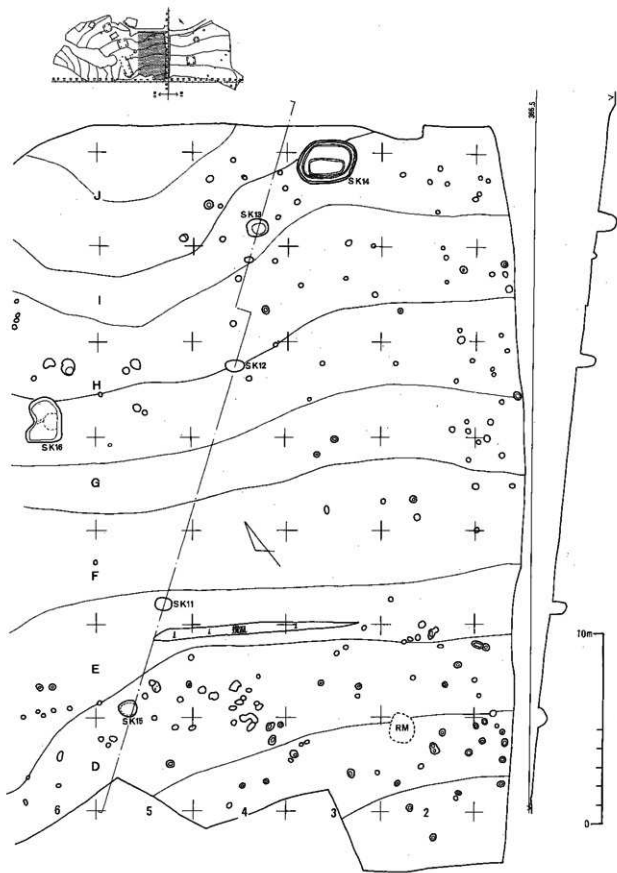


图10 II区遺構実測図 1:200

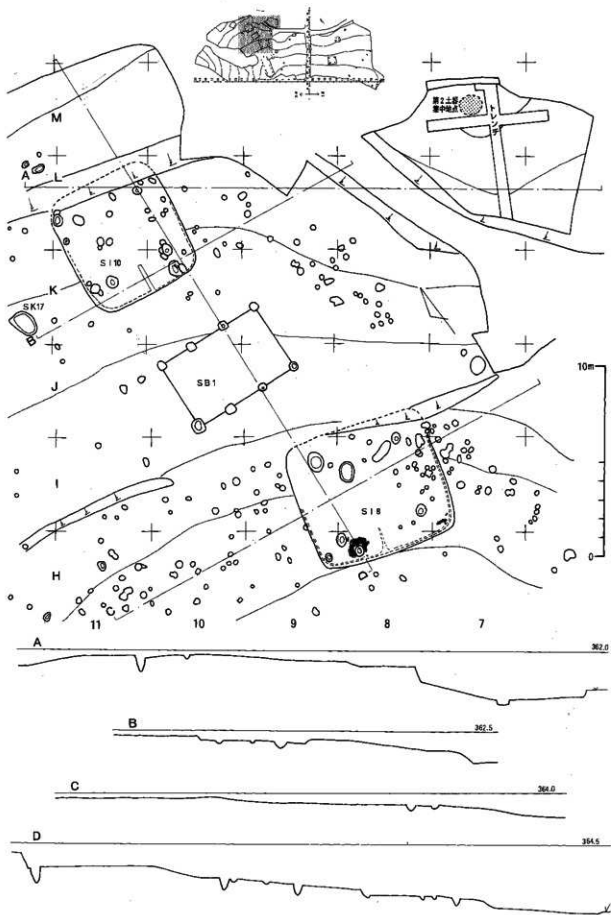


图11 II区遺構実測図 1:200

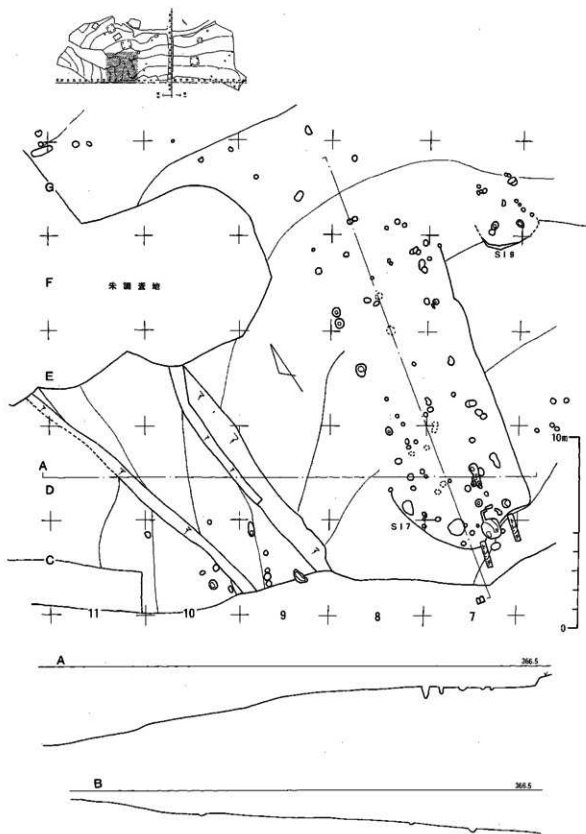


图12 II区遺構実測図 1:200

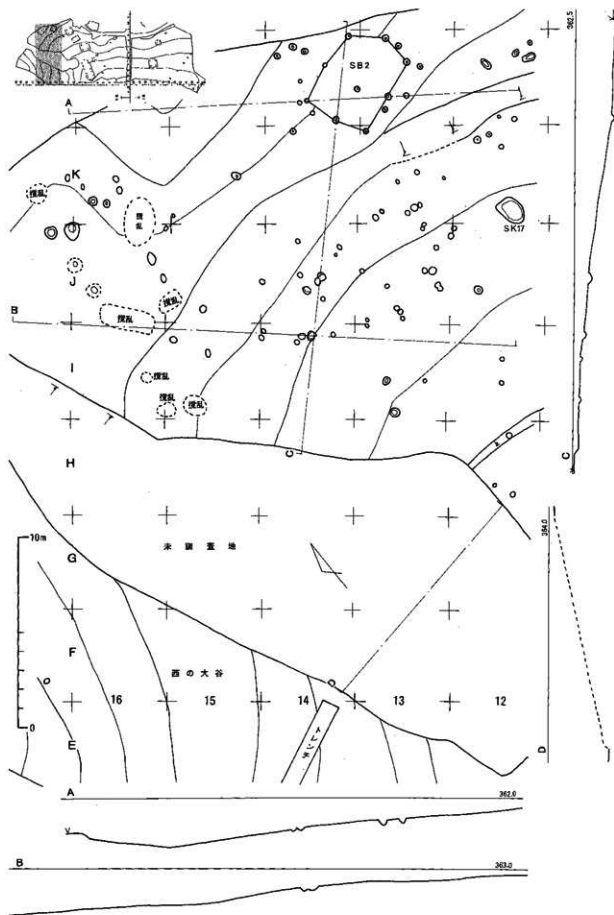


图13 II区遺構実測図 1:200

第3章 縄文時代

1 遺構 (図14)

この時代の遺構は、I区で土坑10基・II区では竪穴住居址2軒と土坑7基が検出されている。また、遺物が検出された遺構はS I 7とSK16のみである。以下順を追って述べることにする。

A 竪穴住居址

(1) 7号住居址 (S I 7・図15)

II区のC~G-6~9に位置している南北棟の大型住居址の南端部は、他の住居址と重複していたと考えられるが、ここでは7号住居址として報告することにする。

検出 南端部は不明確だったが、上面輪郭はほぼ長楕円状で検出された。南端部東隅は礎型となっていて、西へのびるラインは途中で切れ、また、西隅の弓形にのびるラインも途中で切れている。この状況から大型住居址の上に重なる状態で、少なくとも両プランをもつ住居址があったのであろう。しかし、この部分の掘り下げの結果、地山にいたるまで1ないし2回の床面らしき堅い面を確認したが切りあい関係を明確にすることができなかった。

大型住居址の北半部分の床面は攪乱され北傾斜となっていたが、その中で柱穴が南北に列をなして検出され、その内側で焼土も10数箇所検出された。

また、遺物は深鉢・ミニチュア土製品をはじめ縄文時代中期の土器が南端部に集中していた。東壁沿いにも散在的に検出されている。この時代の石器も大半はこの住居址から検出された。

主柱穴 列をなしているの、列別にまとめてみる

東側の列にはP18、P17、P14、P13、P11、P18、P30があり、これに対応する西側の列ではP21、P23、P7、P6、26、P27であろう。中の列はP19に対応するものとして、深さに難があるもののP32を考える。ただしP32とすると、南側の壁の輪郭と整合しない。南部については確定できない。東側の列は東壁から西へ約90cmの間隔を保ち一線上に在る。ただ

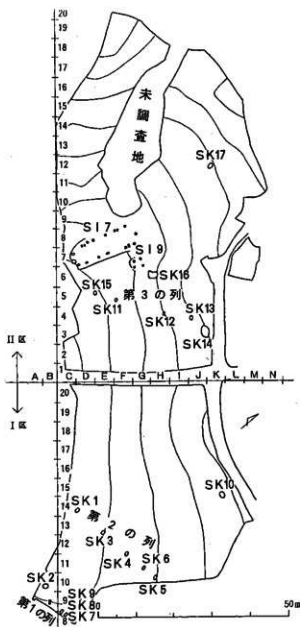


図14 縄文時代の遺構分布図 1 : 100

しP13は約30cm西に寄った位置にある。間隔はP17とP14は約2mとせまいほかは、3m前後となっている。

西側の列はP21とP27を結ぶ線上に在るが、P26が約30cm東に寄った位置に在る。

東側と西側の柱穴の間隔は北側で約5m、南側で約4.5mを測る。位置については必ずしも対応した位置ではない。隣接したピットは補強用として使われたのかも知れない。

主柱穴の規模は表2のとおりである。

表2 主柱穴規模一覧 (単位cm)

西側の列			中の列			東側の列		
ピット	直径	深さ	ピット	直径	深さ	ピット	直径	深さ
21	39	52	19	30	90	18	32	34
23	41	42	32	31	22	17	32	60
7	45	48				14	40	92
6	40	60				13	34	54
26	42	50				11	45	70
27	25	60				8	40	60
						30	50	46

規模 長径は、P19からP32として約17.7mを測る。短径は、Fラインの東壁からP7から西へ90cmの地点で約7.2mである。

壁高 東側C地点で40cm、E地点で20cmを測るが、傾斜線に添い北へ低くなりP17の東側で攪乱のため霧に、また、西側はB地点で約30cm、A地点でも30cmを測るが、P24の西側でこれも攪乱のためこれも霧となっている。

焼土 南半部分で11箇所、北半部分で3箇所検出されたが、炉址かどうかは不明である。

その他

P1～P8からは石器・土器片が検出された。P5の底部からはミニチュア土製品が、P31からは石製品が検出されている。

また、P31とP28内には、粉炭混りの暗褐色土が堆積していた。床面は黄灰色粘質土で硬くしまっている。

(2) 9号住居址 (S19・図16)

区のF・G～6・7に位置する。主柱穴はP1～P4であり、P4はP2に比し約20cm西に寄っている。直径はP3で約30cmを測る。他の3本は一定していないが同様であったものと思われる。深さは検出面から約20cm～30cmである。

炉址は主柱穴のほぼ中央で検出された。壁はC点付近に僅かに残るのみで、他は攪乱のため全く残っていない。C点での壁高は約10cmを測る。プランは円形と思われる。床面は黄褐色土で硬くなっていたが、攪乱のため定かではない。

B 土坑

土坑は17基、黄褐色土上面で検出された。このうち「落し穴」が1基、これに類似したもの3基、その他3基である。その他3基のうち1基は出土遺物によってこの項に含め、残る2基には出土遺物がなく迷っ

たが、とりあえずこの項で扱うこととした。

(1) 落とし穴

落とし穴11基は、3つの列に分けることができる。また、遺物は全く検出されなかった。

第1の列(図14)SK7・8はI区C-8に位置し、SK9は同区B-9に位置する。3基とも西から東への傾斜線上に並び、長径はこれにクロスして掘られている。

SK7は、隅丸長方形で105cm×38cmを測る。確認面からの最大深(以下深さという。)97cmを測り、底部は平坦で鼓形状に掘られ、全体に北西に片寄っている。中心に棒状痕1箇所が認められる。

SK8も隅丸長方形で、110cm×43cmを測る。深さは107cmである。下層にいくに従い南北に広がり底部は(123cm×35cm)平坦で鼓形状に掘られている。中心より西北寄りに1箇所認められる。変形部分は掘り過ぎの感は否めない。SK7とは西南方向に約80cm離れている。

SK9は検出面でも鼓形状で109cm×30cmを測る。深さは73cmである。底部は平坦で北西に片寄り、中心に棒状痕1箇所が認められる。SK8の西南方向へ3.5m離れている。

第2の列(図14)5基ともI区内で、SK1はC・D-14に、SK3はE-12・13にSK4はF-11・12に、SK6はG-11に、SK5はH-10に位置している。検出面は楕円状、底部は隅丸長方形になっていて、棒状痕が他のものより深いのが特徴である。

SK1は、140cm×95cmを測る。深さは115cmである。底部は平坦で中心に棒状痕2箇所が認められる。

SK3は、105cm×70cmを測る。深さは108cmである。底部は平坦で、ほぼ中心に棒状痕1箇所が認められる。SK1とは8m離れている。

SK4は、110cm×60cmを測る。深さは100cmである。底部は平坦で、ほぼ中心に棒状痕1箇所が認められる。SK3との間隔は7.5m。

SK6は、100cm×50cmを測る。深さは110cmである。底部は平坦で南寄りに広く掘られている。中心に棒状痕2箇所が認められる。SK4との間隔は5m。

SK5は、125cm×60cmを測る。深さは100cmである。底部は平坦、棒状痕は中心よりやや北に寄っている。SK6ととの間隔は約3mである。

この列はI区南端部に在って、東方への傾斜地に、長径を傾斜線にクロスする形で掘られている。SK1を除き検出面の上部は相当に攪乱されていた。

第3の列(図14) この列はII区。SK11はF-5に、SK12はH-4に、SK13はJ-4に位置している。検出面は楕円状を呈している。

SK11は、85cm×60cm、深さ65cmを測る。底部中央はやや凹み、棒状痕は北西に寄り掘られている。

SK12は、95cm×65cm、深さ75cmを測る。内部は南壁方向へふくらんで掘られている。棒状痕は中心位置している。テフラ部分は掘りすぎである。

SK13は、110cm×90cm、深さ85cmを測る。底部は平坦に近く、棒状痕1箇所を有している。

間隔は、SK11とSK12は12.5m、SK12とSK13は6.5mとなっている。

この列は、北東への傾斜地に掘られている。

(2) (1)に類似した土坑

SK2は(図19)、I区B-10に位置する。140cm×113cm、深さ90cmを測るが、北方向へ約20cmの掘り過ぎがあるため、点線で示したようにほぼ円形のプランである。底部も円形で北寄りに棒状痕と思われる小穴1箇所を有し、南西側が約15cm浅く、また、北側へふくらんで掘られている。

SK10は(図19)、I区14・15に位置する。140cm×135cmを測り、ほぼ円形である。深さは57cmである。底部も円形で摺鉢状となっていて、中心から東側へ少しずれて直径約25cmの穴1箇所を有している。

SK15は(図20)、II区E-5に位置する。85cm×87cm、深さ45cmを測る。だ円状を呈し底部は周囲から中心に向いやや深く掘られている。棒状痕は認められなかったが、(1)の第3列の線上に在る。

(3) その他の土坑

SK16は(図21)、II区G・H-6に位置する。250cm×90cm、深さ40cmを測る。2基の土坑による切りあいと思えたが、切りあいはなかった。点線部分が最も深く周囲からこの部分になだらかに傾斜している。

出土遺物は、遺構検出面(点線部分の上部)で縄文時代土器片が、また、靴先状の北寄りの黑色土中から凹石が検出されている。

SK14は(図20)、II区J・K-3に位置する。300cm×215cm、深さ18cmを測る。楕円状に溝がめぐり、中に長方形(190cm×90cm)の掘りこみがあり、深さは周囲の溝と同じ18cmであった。

SK17は(図21)、II区K-12に位置する。140cm×100cm、深さ25cmを測る。半円状を呈し、検出時西隅に焼土が認められた。底部は平坦である。

また、SK14・17の土層堆積状況は調査時の誤認などから図示できなかった。

なお、遺物はSK16を除き、いずれの土坑からも検出されなかった。

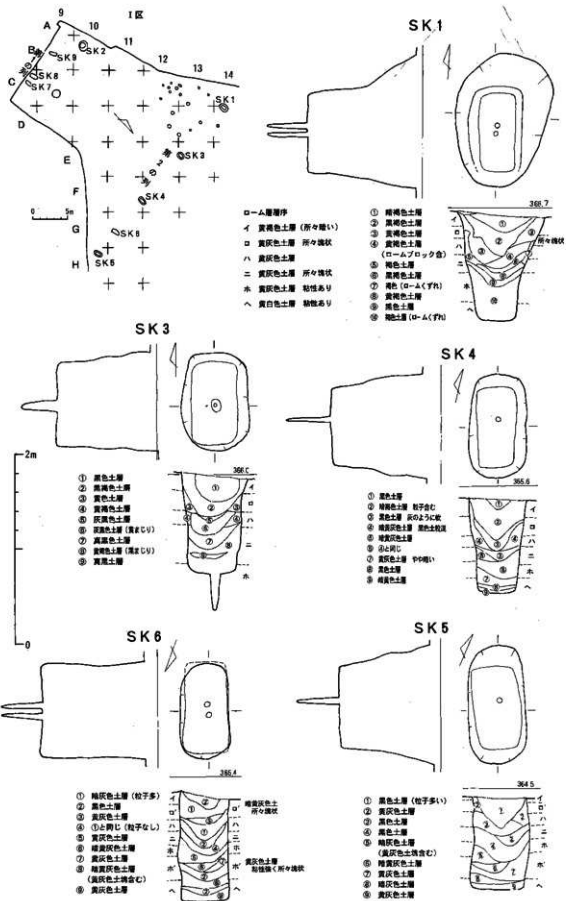
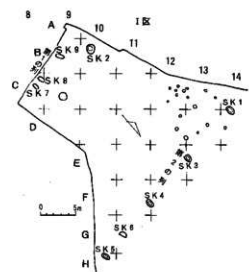
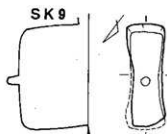


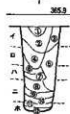
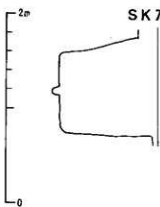
图18 土坑実測图(1) 1 : 40



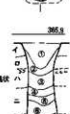
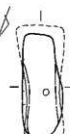
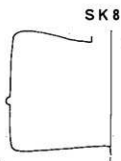
- ローム層序
 イ 暗黄褐色土層
 オ 黄褐色土層
 ハ 黄灰色土層
 ニ 黄灰色土層 ハードキョロ
 ホ 黄灰色土層 粘性あり



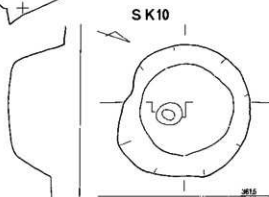
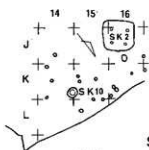
- ① 黄灰色土層(中砂り)
 ② 黄灰色土層
 ③ 暗黄灰色土層
 黄褐色土層
 ④ 黄灰色土層
 ⑤ 暗黄灰色土層
 ⑥ 黄灰色土層



- ① 黄灰色土層色ウツ
 ② 黄灰色土層色ウツ粘土多
 ③ 暗黄灰色土層
 ④ 黄灰色土層
 ⑤ 黄灰色土層
 ⑥ 暗黄灰色土層
 ⑦ 暗黄灰色土層
 ⑧ 黄灰色土層
 ⑨ 暗黄灰色土層黄灰色土層混合
 ⑩ 黄灰色土層
 ⑪ 黄灰色土層



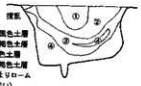
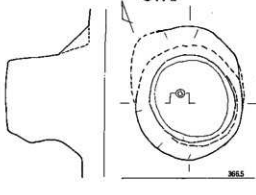
- ① 黄灰色土層(粘土多)
 ② 暗黄灰色土層
(粘土多)
 ③ 黄灰色土層
 ④ 暗黄灰色土層
 ⑤ 黄灰色土層
 ⑥ 黄灰色土層
(黄灰色土層り)
 ⑦ 黄灰色土層
 ⑧ 黄灰色土層



- J 黄灰色土層
 K 黄灰色土層
 L 黄灰色土層粘土多
 M 黄灰色土層
 N 暗黄灰色土層



- 黄灰色土層
 粘土多
 黄褐色土層
 粘性あり



- ① 暗黄灰色土層
 ② 暗黄灰色土層
 ③ 黄灰色土層
 ④ 暗黄灰色土層
(ローム多)

図19 土坑実測図(2) 1:40

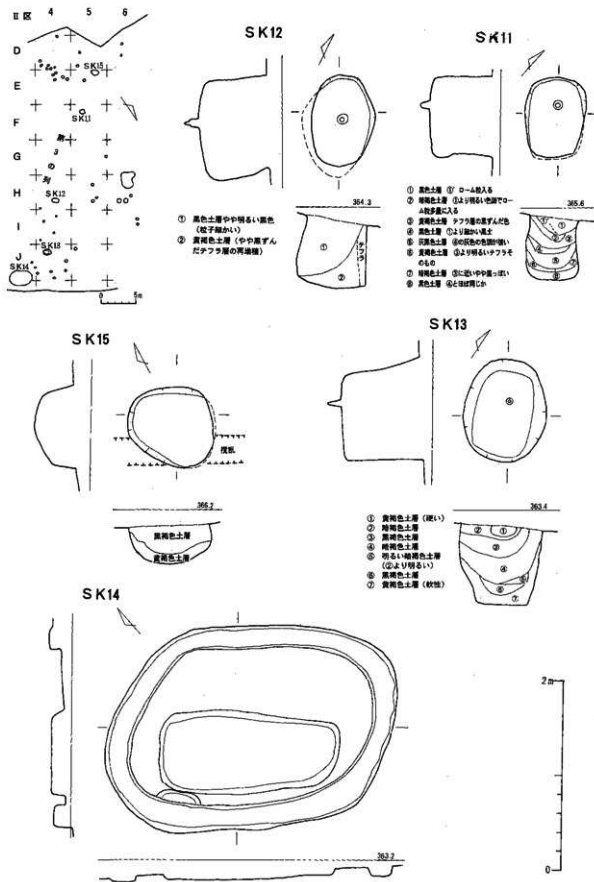


図20 土坑実測図(3) 1:40

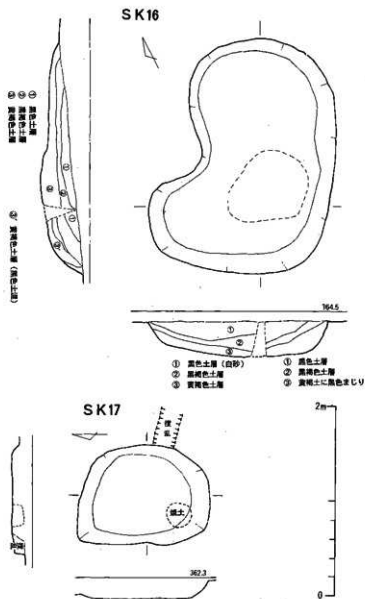
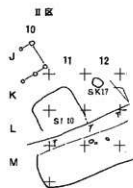
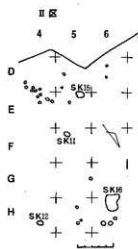


图21 土坑实测图(4) 1 : 40

2 出土遺物

A 土器

(1) 早期の土器 (図21-1・2)

1の表面は、 ℓ 撚糸文が条痕状にかきとられて不鮮明である。また裏面は、横位の条痕のようであるが剥落がひどく不明である。

2は、下方に指頭圧痕がみられる無文の破片である。早期後半の所産であろう。

(2) 前期の土器(図21-3~7) 3は、口縁部に半載竹管で木葉状の弧線を描く。地文に横位のLR単節縄文を施している。その他は胴部破片で、RL、LR単節縄文の組み合わせにより羽状縄文を描出している(4~6)。5は結び目が明確にわかり、6はさらに下へと続いている。

7はこの時期に入れるにはやや不安であるが、胎土の類似からこの時期におく。大粒で粗雑なRL単節斜縄文を施す円筒形深鉢の胴部破片である。3の文様モチーフ等が、常盤の大倉崎遺跡出土土器に類似性をもち、諸磯b様式後半の所産であろう。

(3) 中期の土器(図22・23-8~54)

中期の土器は主として大型住居址S17から出土している。ただしS17の土器出土量の多い南端部は複数の住居址が重複していた可能性が高く、また少片での出土が多い。完形で出土した50をのぞいてS17出土品とするには躊躇される。したがってここでは中期の土器として一括して報告する。出土地点は図に示した。

半載竹管による半隆起線文によって主モチーフを描出するもの(8~49)と、縄文、撚糸文を施すもの(50~54)とがある。

8~18は半載竹管による半隆起縄文が浅いものである。8は口縁下に半隆起縄文を横走させ、その下に三葉状の文様と逆「U」字状文を配する。11は頸部がくびれるもので渦状文をもつ。14~18は縄文地文である。19・20は口縁部に円文をもつもので、19は貫通する。

21~30は半載竹管による半隆起線文8~18に比べ深いものである。21~22は口縁端部で23は口縁端部に刻み目をもつ。26は半隆起縄文に刻み目をもちその上に刺突文がめぐる。24、28は半載竹管による連続爪形文をもつ。30・31は縄文地文である。

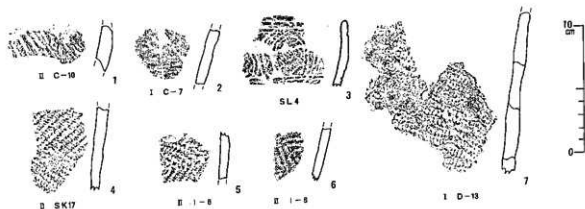


図22 縄文土器実測図(1) 1 : 3

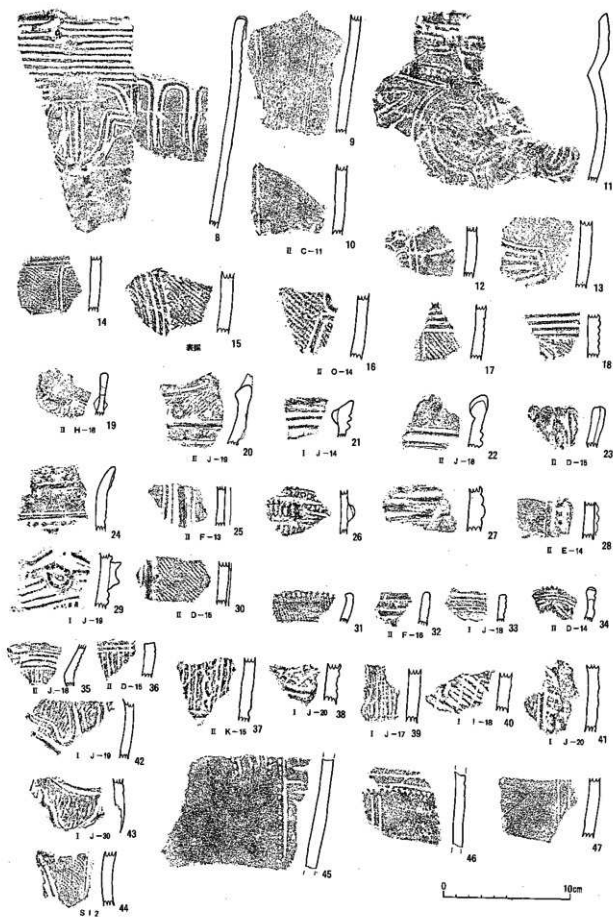


图23 縄文土器実測図(2) 1 : 3

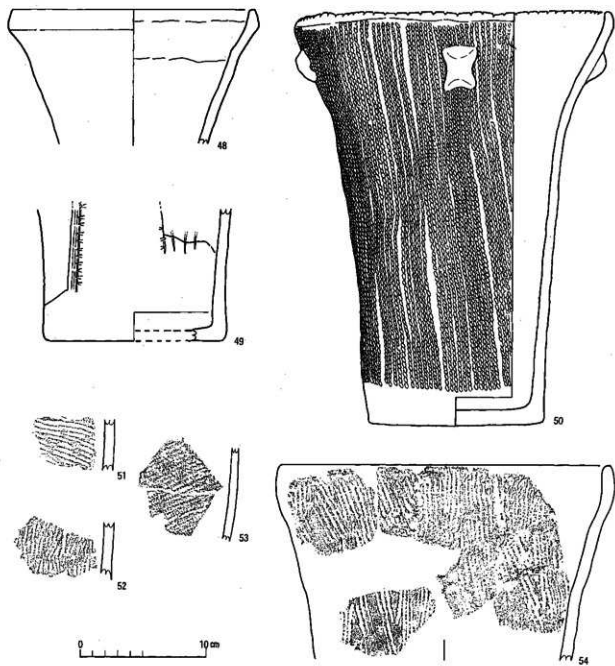


図24 縄文土器実測図(3) 1 : 3

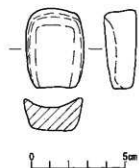


図25 縄文時代の土製品 1 : 2

32~36は細かい刻目をもち、蓮華文風の文様をもつものである。薄手の土器で、34は波状口縁である。
37~41は格子目文をもつもので、半載竹管による半隆起線文で囲まれた中に半載竹管による格子目文を充填する。

42~44は摺糸文地文で半隆起線による変形「B」字文風の文様をもつ。他の類に比べ焼成が良く堅い。

45~49は沈線+刺突文をもつものである。平行沈線文の外側に刺突文を配する。文様の間隔が広い。

50・54は摺糸文土器である。50は略完形品で、全面に細い6本1単位のLの摺糸文が施文される。口唇部には刻目がめぐり、口縁部外面に4単位の橋状把手がつく。口径25.5cm、器高33.0cm。54は摺糸文を木目状に押圧する。ただし典型的な木目状摺糸文ほど整然としていない。

51~53は縄文土器でLR単節斜縄文が施されている。

以上の中期土器のうち、半載竹管による半隆起線文によって主モチーフを描出するものは、北陸の新保・新崎式に系譜が求められるもので、中期前葉に比定される。このうち半隆起線文が浅いものはやや古相である。蓮華文・格子目文をもつものは新相で前葉後半に、変形「B」字文をもつものは前葉終末に比定されよう。

縄文・摺糸文をもつものについても前葉終末に比定されよう。

両者とも胎土に金雲母を多く含むものが目立ち、焼成は軟質のものが多し。色調は褐色~茶褐色系である。

B 土製品 (図25)

一点のみであるが、石皿を模したと思われるミニチュア土製品が出土している。

側縁をもち、平坦な凹み部や掃き出し口を備えている。色調は褐色で全長4.1cm、重量19.9gを測る。

S17のP5底部より出土している。

B 石器・石製品 (図26・27)

縄文時代の石器は、総数17点と少ない。この他剥片も若干出土している。出土地点は主として7号住居址である。計測値等は第3表に掲載したので、ここでは器種別に簡単に説明を加える(図26・27)。

(1) 石鏃(1・2)

いずれも黒曜石製の無茎石鏃である。両者とも正面右基部側を欠く。

(2) 打製石斧(3)

ややずんぐりした形態の石器で、石斧の形態とやや異なるが、側縁の加工状態や刃部形態から石斧と判断した。横長の剥片を加工して、基部側を除いた周囲を急斜剥離で形態を整え、刃部は主に裏面側に加工を施している。

(3) 剥片石器(4~7)

具体的な名称は不明であるが、明らかに二次加工を施した石器(4)、使用痕の認められる石器(5)、へら状の石器(6)等がある。4は器厚が薄いので、スクレイパー的な機能が想定される。5は不定型な剥片であるが、鋭い右側縁に使用痕と思われる小剥離痕が認められる。6は耕作による新しい傷が多くつけられている。へら状石器と呼ばれるものに類似する。なお、7は黒曜石製の剥片である。二次加工は認められないが、石鏃2点以外では唯一の黒曜石である。

(4) 磨製石斧(8)

唯一の磨製石器である。よく磨かれた定角式の優品であるが、刃部は使用のためか表裏ともに破損している。

(5) 敲石・くぼみ石・磨石(9~17)

二種類の機能を持った石器も存在するためここでは一括して報告する。9・10は掌に収まるような小型の敲石で、9は両端に、10は一方の端部に敲打痕が認められる。10は石質にもよるが、むしろ磨っているような状態に近い。11・12・13はくぼみ石である。

11は長方体の四面全部に2乃至3か所のくぼみ部を持つ。12は11とほぼ同様な大きさであり、主体的なくぼみを持つ面は正面のみであるが、右側縁側及び裏面側にはくぼみとも敲打痕ともつかない使用痕が残されている。また、両端部には敲打痕が明瞭に残されており、くぼみ石と敲石の両者の機能を持った石器であると考えられる。なお、全体的に黒色でひびが入っており火熱を受けたと推定される。13は破損品であるが、12と同様くぼみ部分と敲打痕の両者が認められる。14は敲石であるが、9・10例のように明瞭ではない。15は扁平で丸い形態を呈し、その周囲全面に磨面が認められる磨石である。16は破損しているが、球状の形態であったと思われ、全体に磨っている。17は長方体の形態で、各面は平坦である。加工痕は認められないが、7号住居址の床面から出土したものであり、あるいは台石としたものかもしれない。

(6) 小括

7号住居址を中心とした石器類を説明してきた。住居址より出土した石器の種類は、石鏃・打製石斧・スクレイパー・磨製石斧・敲石・くぼみ石・磨石など種類としては、該時期における石器バラエティーの大半を保有していたみとなる。しかしながら、数量的にはそれぞれ数点と少なく、また、散在的に出土したもので、一軒の石器保有数量の目安とはならないだろう。

7号住居址が重複していた可能性があるとはいえ、長大な建物があったことはほぼ断定できよう。石器類は、この長大な堅穴住居内のピット等より出土したもので、石鏃などの直接的な生産用具が少なく、くぼみ石・磨石などの間接的な石製品が比較して多いことも、住居址の性格の一端を表しているようにも思える。

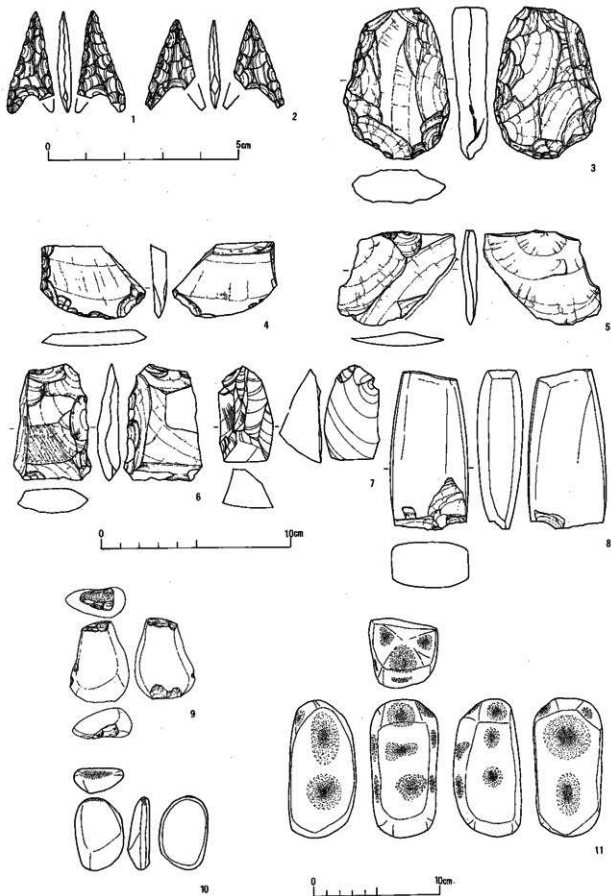


図26 縄文時代の石器・石器製品(1) (1:1、1:2、1:3)

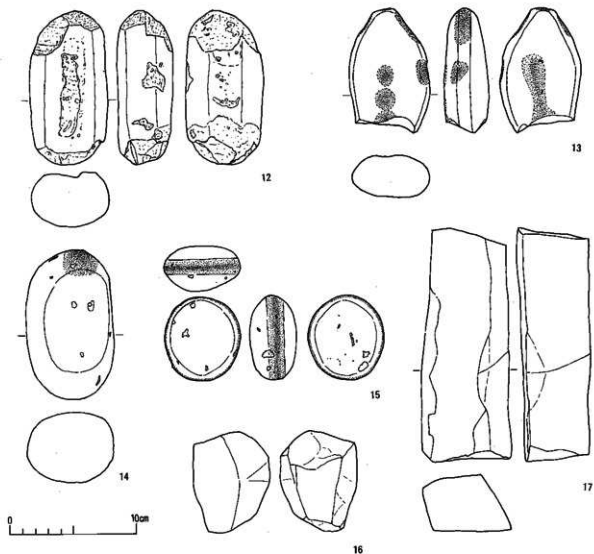


図27 縄文時代の石器・石器製品(2) (1:3)

表3 石器計測表

図版 番号	機種名	計 測 値				石器固体番号 ※取り上げ次の 旧名称	石 質	備 考
		長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g			
1	石 鍬	22	(12)	3	0.9	SI 3-44	黒曜石	破損
2	石 鍬	24	(12)	2	0.7	SI 3-129	黒曜石	破損
3	打製石斧	80	56	19	95.6	LM 6・7	砂岩	
4	スクレイパー	39	55	7	22.7	SI 3 P.	安山岩	
5	スクレイパー	49	61	8	21.1	SI 3 P.	安山岩	
6	へら状石器	61	42	13	39.2	J-15	安山岩	
7	剥片	51	24	22	28.7	H 9	黒曜石	
8	磨製石斧	84	41	24	154.6	SI 3 141	蛇紋岩	
9	敲石	65	46	23	90.1	SI 3 6	砂岩	
10	敲石	58	39	17	55.0	SI 3 68	砂岩	
11	くぼみ石	109	54	54	438.9	SK17	砂岩	
12	くぼみ石・敲石	121	61	44	451.7	SI 3 7	不明	
13	くぼみ石・敲石	(97)	64	35	286.7	SI 3 179	砂岩	破損
14	敲石	117	69	55	709.1	SI 3 188	砂岩	
15	磨石	61	60	37	197.1	SI 3 189	砂岩	
16	磨石	(79)	(61)	(58)	271.6	SI 3 39	砂岩	破損
17	台石(?)	183	72	57	1096.5	SI 3 121	不明	

第4章 古墳時代

1 遺構

この時代の遺構は、I区で竪穴住居址2軒、II区で竪穴住居址2軒及び獨立柱建物址2棟が検出されている。特に、II区のS I 8とS I 10の間にはS B 1があり、ほぼ一直線状に並んで発見された(図28)。また、各住居址からは古墳時代前期の土器片が出土している。

A 竪穴住居址

(1) 5号住居址(図29-S I 5)

I区F・G-16・17に位置する。一辺7mの方形プランを呈する大型住居(約15坪)であるが、北東側は壁が失われている。床面は黒色土に黄褐色土が混じり、堅く締まっていた。

壁高は、南西側で40cmを測る。東南壁と西北壁は北東方向へ傾斜線に沿って低くなり、推定線のところで壁が失われる。主柱穴はP1~P4と考えられ、深さが1.0m~1.2mを測る。P5は北東壁に接しており貯蔵穴と思われる。その他、深さ15cm前後のピットが多く認められる。周溝(深さ約3cm)は、南西辺の中ほどから西隅のP9までのびている。

遺物は少量で、散在的に出土した。覆土は黒色土の1層であった。

(2) 6号住居址(図27-S I 6)

I区I・J-15・16に位置する。一辺4mの方形プランで、広さは約5坪である。床面は黄褐色土(貼床)で堅く締まっている。

壁高は、南西辺で約30cmを測る。他の二辺は傾斜に沿って低くなり、推定線のところで壁が失われる。主柱穴はP1~P4で、深さ60~70cmを測る。焼土は、中心より北西よりに二か所確認された。P4のピット内に壺の胴部下半が発見された。上部は耕作により失われたものと考えられ、このピットは貯蔵用ピットと思われる。

また、土器片などの遺物は、中心より南西側に集中して出土した(図30)。まばらな北東側は攪乱を受けたからかもしれない。

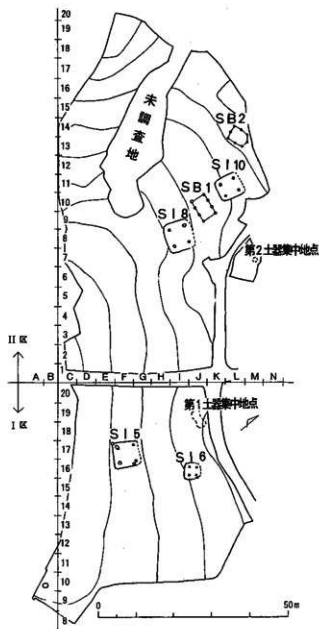


図28 古墳時代の遺構分布図(1:1,000)

(3) 8号住居址(図31-SI8)

Ⅱ区H-J-7~9に位置し、主軸の方位はほぼ南北である。東西に7.8m、南北に6.9mの長方形プランを呈する大型住居で、広さは約54㎡(約16坪)である。北東部は攪乱を受けその姿をとどめていない。

床面は、黄褐色土に黒色土混じりで、堅く締まっていた。主柱穴はP1~P4で、深さは90cm~100cmを測る。深さ10cm内外の小ピットも多く検出されている。炉址は北西の位置で焼土が確認された。壁高は南壁で約57cmを測るが、東西の壁の一部と北壁は残っていない。

遺物は多量に出土した(図33)。また、P1~P7の各ピットからも検出されている。特に東海系の壺の口縁部が南東隅の床直上から検出されるとともに、P6の周囲には小石が敷き詰められ、ピット底部にも一握りくらいの石が並べられている。埋土は自然堆積の状態と思われる。

(4) 10号住居址(図31-SI10)

Ⅱ区のK-L-10・11に位置している。方位はほぼ南北で、東西6.2m、南北に6.6m(推定線)の隅丸方形プランを呈している。北側は、畦畔で削りとられている。広さは40.9㎡(12坪強)である。壁高は南壁で25cm、東壁南端部では26cmを測る。東西壁とも北方向へ徐々に低くなり、推定線の付近では壁が失われている。周溝は南壁東側で切れているが、三辺に沿って4cmの深さで巡っている。また、南壁の周溝のほぼ中央より住居址の中央に向かって深さ約8cmの溝がのびる。

焼土は中央より北西よりに3か所認められ、焼土1の下部は10cmほどの深さで船底状となっている。焼土2・3の下部は6~7cmの深さで窪んでいる。主柱穴はP1~P4で深さは95cm~110cm、径は約50cmと大きい。

遺物は多く出土し、P5からは赤色塗彩された土師器壺等が検出されている(図34)。

B 掘立柱建物址

Ⅱ区内で2棟検出され、遺物は検出されなかった(図35)。

(1) 1号掘立柱建物址(SB1)

J・K-9・10に位置している。規模は桁行3間(5.9m)、梁行1間(3.9m)を測る。柱穴の掘り方は隅丸方形で、直径は30~60cmを測る。深さはいずれも確認面より約60cmを測る。坑底は黄灰褐色粘質土まで掘り込まれている。

また、8号住居址と10号住居址の中間に位置しており、それぞれ3.5mの間隔がある。いずれかの付属建物であったものと考えられる。

(2) 2号掘立柱建物址(SB2)

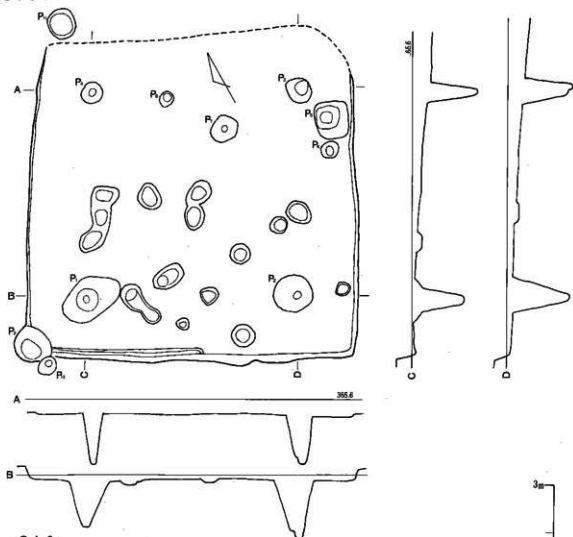
Ⅱ区K-L-13・14に位置し、SI10より1m近く低く、南西に約8m離れている。

規模は、桁行2間(4.3m)×梁行1間(3.4m)で、梁行の中間に間柱があって、東側の間柱は70cm、西側の間柱は20cm、西隅を結ぶ線よりそれぞれ突出している。棟持柱と思われる。また、北側桁行柱一本が20cm外側へ突出している。なお、梁行方向が約40cm西方向へ垂んだ形となっている。

柱穴は円形で直径25cmを測るが、P6のみが20cmとなっている。深さは、検出面より南側が20~30cm、北側では10~15cmである。深さの差は、北方向への傾斜地に立地しているためと思われる。間柱はP8が約30cm、P4は15cmほどである。

建物は東西に長く、梁行は西方向へ約40cm垂んだ形となっている。

S 15



S 16

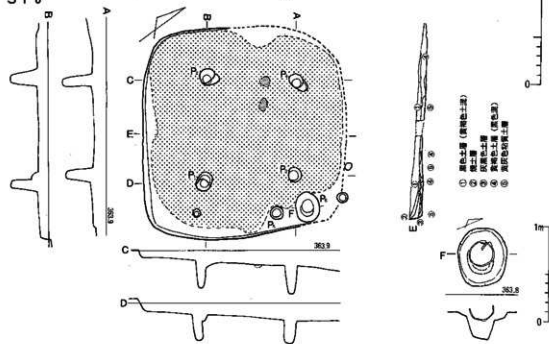


图29 5号窑穴住居址·6号窑穴住居地 1:80 6号住居址 下部出土状况 1:40

C 遺物集中地点 (図28)

(1) 第1土器集中地点

I区のJ-18・19に位置する。小さな谷の黒色土上面で古墳時代前期の土器片が多く検出された。また、縄文時代の土器片も土師器と混在して出土している。

(2) 第2土器集中地点

II区のM-7に位置する。こども谷状地で黒色土上面より約1mの下層で、古墳時代前期の土器片が大量に検出された。出土状況は、かなりまとまって出土しており他の時期の土器も混在していないため、当該時期の一括の土器溜と考えてよいと思われる。

S16

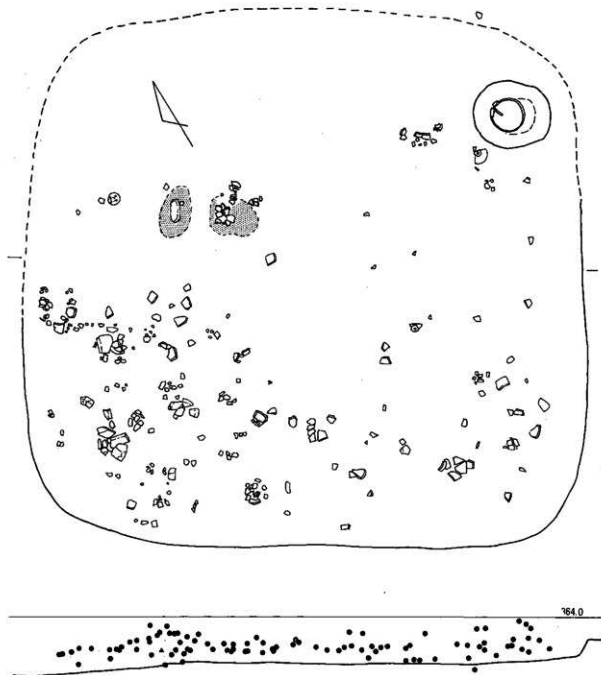


図30 6号壑穴住居址 遺物分布図 1:30

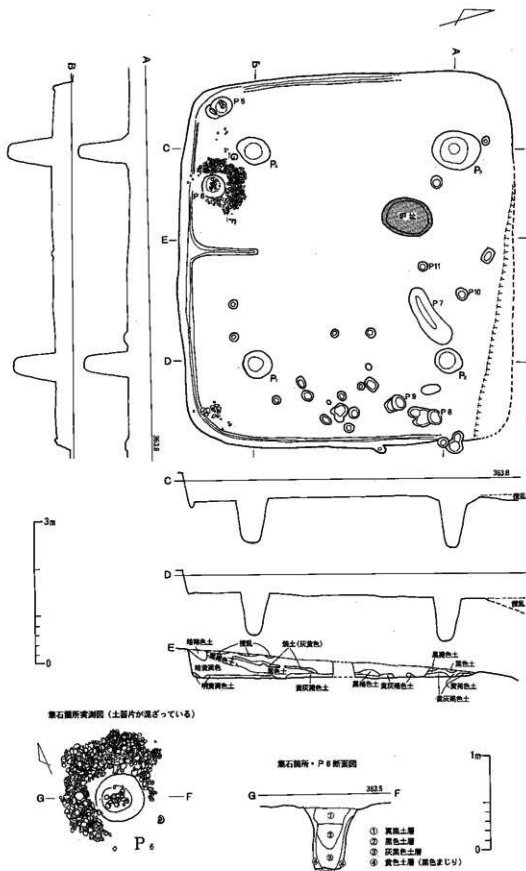


図31 8号壑穴住居址 1:80 集石箇所 1:40

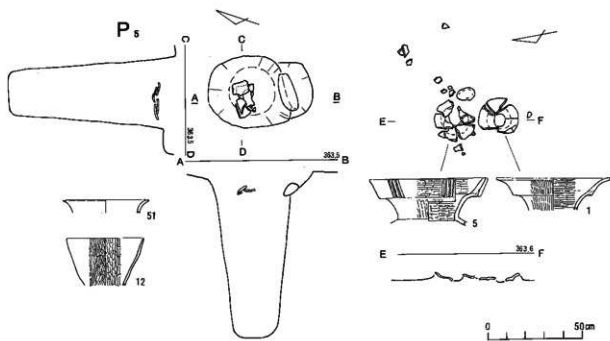
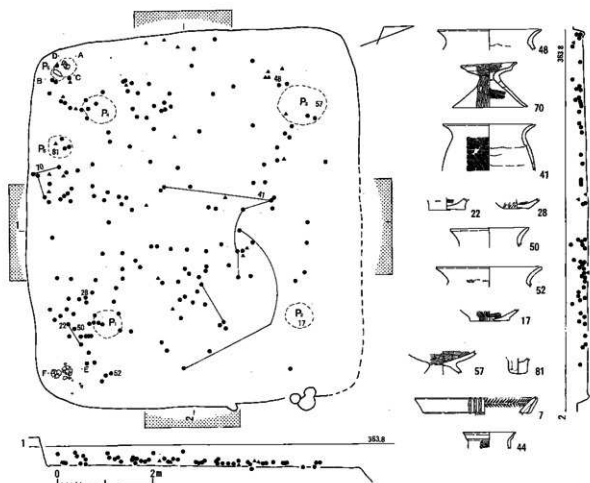


图32 8号竖穴住居址遺物分布图 1:80 P5遺物及び口縁部出土状況 1:20

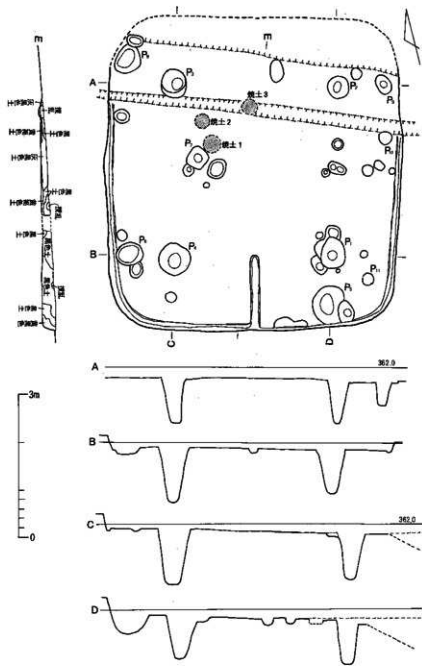


图33 10号整穴住居址 1:80

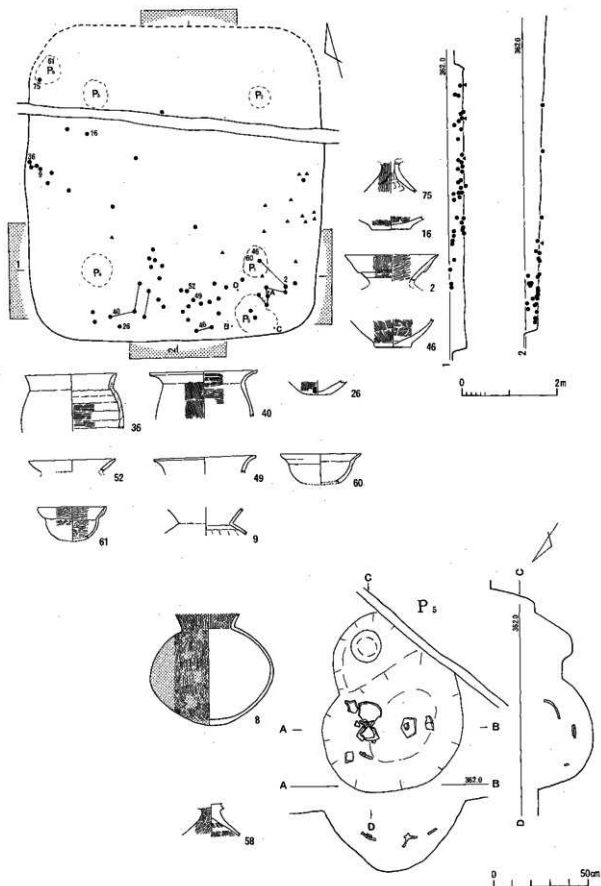
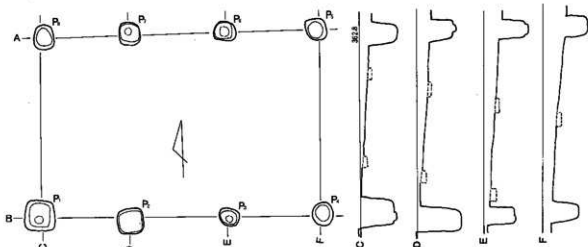


图34 10号竖穴住居址遗物分布图 1 : 80 P 5 遗物出土状况 1 : 20

SB1



SB2

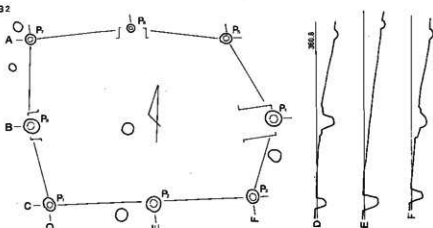


図36 1・2号掘立柱建物址 1:80

2 出土遺物

A 土器

古墳時代初頭の土器が、主として竪穴住居址から出土している。出土量は、遺物収納用コンテナに5箱程度である。以下に分類し説明を加える。

(1) 分類

壺 (図36-1~30)

全形のわかる資料に限られるため、口縁形態を中心として残存部形態によりA~Dに分類を行った。

A類 外反する口縁部に段を有する形態をA類とし、さらに1から3に細分した。

A-1 口縁部が強く外反し、頸部がしまるもの(1~3)。

A-2 口径の大きいもの(4)。

A-3 口縁部に棒状浮文で加飾されるもの(5~7)。

B類 外反する口縁部、「く」の字状に屈折する頸部が球形の胴部へと移行するものをB類とする(8・9)。

C類 細く比較的長い口縁部を持つもので、内湾長頸壺もしくは直口壺と呼称されるものである。1・2類に細分される。

C-1 口縁部が流線的に外反するもの(10)。

C-2 口縁部が直立もしくは内湾気味となるもの(11・12)。

D類 便宜的に口縁部形態が不明なものをD類とする。

壺 (図37-31~52)

壺と同様に全形がわかる資料に限られているため、残存部の形態によってA~Dに分類した。

A類 「く」の字状に外反する口縁部と張り出す肩部を持つものをA類とし、胴部形態によりさらに二つに細分した。

A-1 肩部が強く張り、倒卵形の胴部を持つもの(31~33)。

A-2 胴部が球形に近いもの(34~39)。

B類 口縁部の屈曲がなだらかで、肩部の張りが弱いものをB類とする(40~42)。

C類 なだらかに屈曲する口縁部と球形の胴部を持つものをC類とする(43)。

D類 受け口状の口縁を持つものをD類とする(44)。

高杯 (図38-53~58)

全形のわかる資料はないが、内湾気味の杯部とハの字状に広がる脚部を一括する。

鉢 (図38-59~68)

A~Cに分類した。

A類 平底ではば直線的に開くもの(59)。

B類 有段鉢を一括し、形態によりさらに二分類した。

B-1 内湾する体部が口縁部で段を有し外反ないし直線的に開くもの(60・61)

B-2 精製化した丸底土器で、口径が大きく器高の浅いもの(62~66)。

C類 口縁部が大きく内湾する鉢をC類とする(67)。

D類 C類と同様に口縁部が内湾しさらに高台を有するもの(68)。

器台 (図38-69~79)

A~Cに三分類される。

A類 「ハ」の字状の脚部から直線的に開く受け部を持つもの(69)。

B類 受け部が稜をもち、有断状になるもの(70~72)。

C類 結合器台のもの(73)。

有孔土器 (図38-80)

底部穿孔の土器で、内湾鉢の可能性もある。

ミニチュア土器 (図38-81)

ふたのつまみとも思われるが、ここではミニチュア土器として報告することとする。

(2) 壺

A-1類 有段口縁を呈するもので、1~3の口縁部のみである。1・3に比べ2は簡略化した段部形態である。1~3とも内外面はていねいにヘラミガキをされる。ともに胎土に砂を含む。1はやや軟質で赤褐色を呈す。2は全体に黄灰白色、3は淡い茶色を呈す。推定口径は、1が17.8cm、2は14.6cm、3は16.1cmを測る。1はS I 8床面より、2はS I 10、3はII区F-17よりそれぞれ出土している。

A-2類 4は口縁部の端部に面を有するもので、外面はハケからヘラミガキ、内面はヘラミガキが施されている。砂粒を含む精良な胎土で、明褐色を呈す。推定口径23.3cm。S I 5のP5より出土した。

A-3類 口縁部が棒状浮文で加飾される有段口縁壺である。5は口縁部に5か所に3本単位の棒状浮文で加飾される。口縁部から頸部にかけては、内外面とも縦位または横位のヘラミガキ、内面の頸部稜線以下はナデ。胎土には砂を多く含み、軟質である。色調は茶褐色。口径18.3cmで、S I 5より出土している。6は口縁部に指でつまみあげるように形を整えたと思われる棒状浮文が認められる。外面はハケからヘラミガキで、内面はヘラミガキが行われる。胎土はきめの粗い砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。S I 5より出土している。7は5同様に3本単位の棒状浮文が認められる。口縁部内面はハケにより羽状に整形される。調整全体にナデ。胎土に砂粒を含み色調は赤褐色を呈す。S I 8の出土。

B類 8は精製化し、全面が赤色塗彩される。口縁部を欠くが、他は完形である。丸底の底部からやや押し潰された球形の胴部をもち、「く」の字状から直立気味に立ち上がる口縁形態を呈する。C類に含められる直口壺となる形態かもしれない。外面全体と口縁部内面はていねいにヘラミガキが施される。胎土は砂粒をかなり含むが精製されている。S I 10から出土している。9は摩滅しているため調整等は明確でない。頸部が「く」の字状に外反する形態と思われ、8とやや相違するものかもしれない。S I 10の周溝より出土している。

C-1類 10は頸部より流線的に外反する直口壺である。口縁端部はハケ、その他はていねいなヘラミガキが行われる。胎土には砂粒を含み、色調は淡い茶色である。推定口径10.8cm。第2集地点より出土している。

C-2類 内湾気味の口縁部を持つもので、内湾口頸壺に似る。11は端部内面にハケ痕が残るが、内外面ともにヘラミガキが行われる。12も同様に全体にヘラミガキが行われる。ともに胎土には砂粒を含むが、12はやや軟質である。11は明るい茶色、12は橙色を呈す。推定口径は11が12.6cm、12は12.2cm。11は第2集地点、12はS I 8から出土している。

D類 壺の口縁が不明なものをD類とした。次の底部のものも含めて分類するのが本来の形態分類であるが、便宜的なものとして説明していきたい。13は底部も含め外面ハケからヘラミガキ、内面はハケから

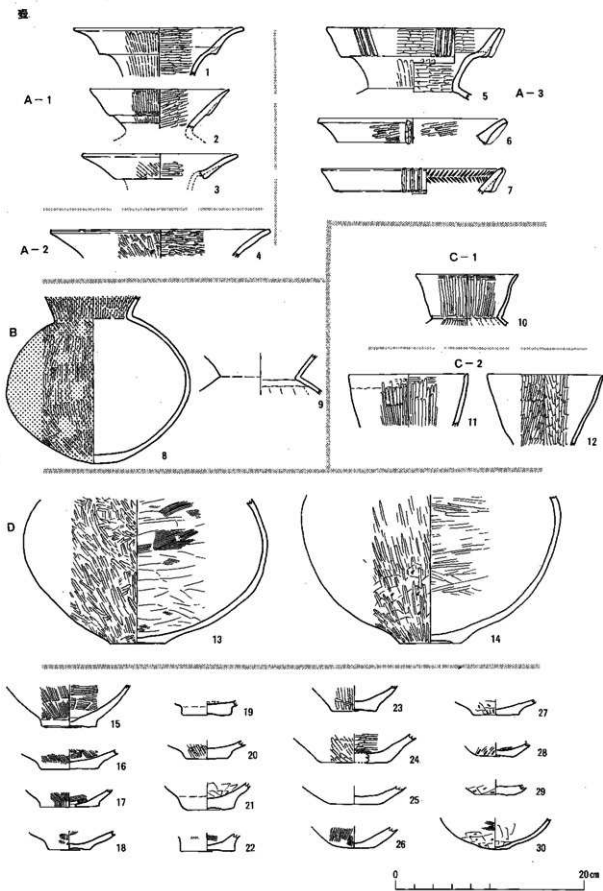


図36 古墳時代の土器 1 : 4

ナデが行われる。14は外面胴下半はヘラケズリの後ヘラミガキがなされる。内面は摩滅のためつきりしない。13は粗い砂粒を多量に含み、外面は黄褐色を呈する。底部径は13は5.6cm、14は6.4cm。13はS I 6のP2、14はS I 6より出土している。

底部 壺もしくは甕の底部を一括して報告する。15~22は突出する底部、23は突出に近いもの、23~30はほぼ平坦な底部のものである。24・25は壺、23・27~30は甕と思われる。ハケ調整(15~18・22~26)、ヘラミガキ調整が中心となるが、特徴的なものとしてヘラケズリによる調整のもの(27~30)がある。すべて胎土に砂粒を含み、色調は全体に褐色系である。15・16・26はS I 10、17・22・28はS I 8、18・25 S I 6、30はS I 5、19はⅡ区L-10、20・21・29はI区J-18、23はI区J-19、24はⅡ区F-18、27はⅡ区D-13の出土である。

(3) 甕

A-1類 31・32は復元によりほぼ完形となったものである。ともに口縁部は内外面ともナデ、胴部内外面はハケ。31・32とも胎土に砂を含み堅緻である。31は褐色、32は暗褐色で外表面には煤が付着する。31は口径15.9cm、高さ推定17.3cmで、残存90%。32は口径17.5cm、高さ推定19.8cmで、残存70%。31・32ともS I 6の出土。33は甕の口縁部~頸部である。内外面ともナデ調整で、内面頸部稜線以下は指頭圧痕がみられる。胎土は砂を含むが堅緻であり色調は茶褐色を呈す。推定口径13.8cm。第2集中地点の。

A-2類 34~39は口縁部・底部等を欠く。39は他に比べ直線的な胴部である。口縁部は内外面ともハケからナデ、胴部外面はハケ調整のものが大半であるが、内面調整はハケ、指頭押圧によるもの、ナデ等が組み合わせられそれぞれに施される。34は胎土にきめの細かな砂を含み、色調は灰褐色で外表面には黒斑がみられる。35は砂を多く含み、外面は茶灰色で内面は黒灰色。36は胎土に砂・小石を含みや軟質で明茶色を呈す。37は褐色、38は暗灰褐色を呈す。39は砂を多く含む胎土で、淡い茶色。38・39とも外面下半に煤の付着がみられる。34は推定口径19.3cm、34・35・37・39はS I 6、36はS I 10出土。

B類 40~42はともに外面は口縁部はナデで、それ以下はハケ調整が行われる。内面は41は不明であるが、40はハケ、42は口縁部をハケ、頸部ヘラミガキ、胴部にヘラケズリ調整が行われる。41には輪積痕が残る。それぞれ胎土に砂粒を含み、40は暗茶色、41は褐色、42は明茶色を呈す。40の推定口径は16.8cm、41は14.6cm、42は16.2cm。41はS I 10、41は8、42はS I 6の出土である。

C類 43は外面口縁部はナデ、胴部はハケ。内面は口縁部がハケ状工具によるナデで胴部は手で押さえたような凹凸が若干ある。かなり薄手の整形で、口縁部は面取りされる。大粒の砂を胎土に含み、色調は灰褐色を呈する。推定口径は17.0cm。S I 6の出土である。

D類 44は小型の有段口縁甕で、口縁部は内外面ともナデ、胴部は内外面ともハケ調整が残る。胎土は粗い砂粒を含み、色調は灰褐色。推定口径8.3cmで、S I 8の出土である。

口縁部 口縁部のみを一括した。すべて「く」の字状に外反する甕で、45・46には口縁の面取りが明確である。また、48は口唇部を細く外につまみ出している。46・47・52にはハケ調整痕が残る。色調は褐色が多い。45・46はS I 6、47・48・50・51はS I 8、49・52はS I 10の出土である。

(4) 高坏

「ハ」の字状に広がる脚部と、やや内湾気味に広がる坏部を持つもので細分はできない。53~56は内湾気味の深い坏部となるものである。口縁端部は丸くおさまられている。内外面ともにヘラミガキが行われる。53・54は胎土にやや大粒の砂を含み、全体に淡褐色~暗褐色を呈する。53~55はS I 6、56は第1集

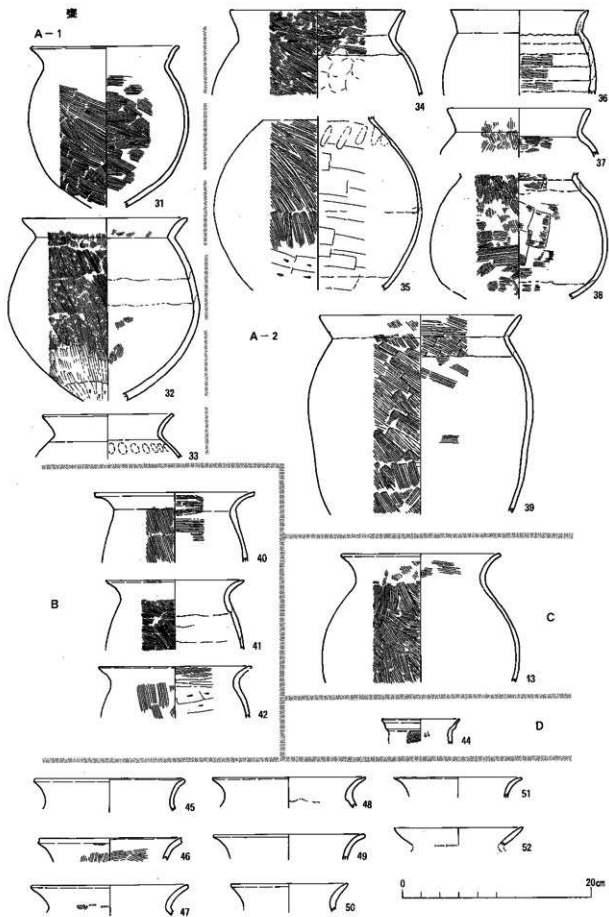


図37 古墳時代の土器 2 1 : 4

中地点より出土している。57の坏部は内外面ともヘラミガキ、脚部の外面はナデが行われる。58は脚部外面がヘラミガキ、内面はハケである。ともに胎土に砂粒を含み、57は淡い茶色、58は茶色を呈する。57はS I 8のP3、58はS I 10のP5からの出土である。

(5) 鉢

A類 59の一点のみの出土である。平底の底部からやや内湾気味に開く器形を呈する。内・外面・底部ともにナデ調整が行われている。胎土には砂粒をほとんど含まず、色調は黄褐色を呈する。推定口径14.0cm、高さ5.0cm、底部径4.5cmで、残存率は50%である。第2集中地点より出土している。

B-1類 深めの有段鉢で、二点出土している。60は摩滅のため調整ははっきりしない。61は内外面ともヘラミガキ痕が残される。胎土には砂を含み軟質である。60は黒褐色、61は淡黄褐色を呈する。60は推定口径12.6cm、61は10.8cmを測る。60はS I 10のP1、61は同じくS I 10のP8より出土している。

B-2類 精製化された口径の大きな丸底の鉢である。口縁部で線をもち有段状を呈し、63・65は明瞭な沈線が加えられる。調整は内外面とも主にヨコのヘラミガキが行われる。色調は62は赤褐色、63は淡い灰褐色、64は赤褐色、65は茶色、66は黒褐色を呈する。出土地は、62・66はS I 6、63・64は第2集中地点、65はⅡ区D-14である。

C類 内湾鉢で五点と最も多く出土している。67は口縁部の外面は粗いヘラミガキで、それ以下はナデ、内面はハケから粗いヘラミガキがなされる。茶褐色を呈し、推定口径は14.7cmである。第2集中地点から出土している。

D類 内湾鉢に脚がついた形態である。外面はハケ調整のままで、内面はハケと下半にヘラミガキが加えられる。内湾する口縁部には一か所注ぎ口がある。色調は茶褐色で、口径10.2cm、器高8.3cmを測る。第2集中地点の出土である。

(6) 器台

A類 「ハ」の字状に開く脚部と直線的に広がる短い受け部を持つ小型器台で、69の一点のみの出土であるが、74~79の脚部のみのものも何点かは本類に含められるものと考えられる。調整は摩滅のため明確でない。淡い褐色を呈し、口径8.5cm、器高7.0cm、脚部径12.3cmを測る。S I 6の出土。

B類 「ハ」の字状に開く脚部で、受け部が有段とり外に開く小型器台で、70~72の三点が出土している。受け部外面は主にヨコのヘラミガキ、脚部はタテのヘラミガキが行われる。色調はいずれも褐色ないし赤褐色を呈する。70はS I 8、71はS I 6のP2、72はS I 6よりそれぞれ出土している。

C類 鉢とあわせて結合器台と思われるもので、73の一点のみ出土している。口縁部及び脚部の裾部を欠損するが大型の器台である。脚部全周に5か所の孔が認められる。受け部内面と脚部外面にはタテのヘラミガキが行われる。

74~79は、A~C類に分類されるべき脚部であるが、明確でないため別にした。A・B類いずれかに分類されるものであろう。なお、77~79は裾部が大きく広がっている。

(7) 有孔土器

80の一点のみであり、有孔鉢としては強く内湾しているために便宜的な名称とした。底部に径0.6cmの穿孔があ。外面胴下部はヘラケズリ、胴部はナデ、内面は板ナデである。色調は暗褐色を呈し、第2集中地点より出土している。

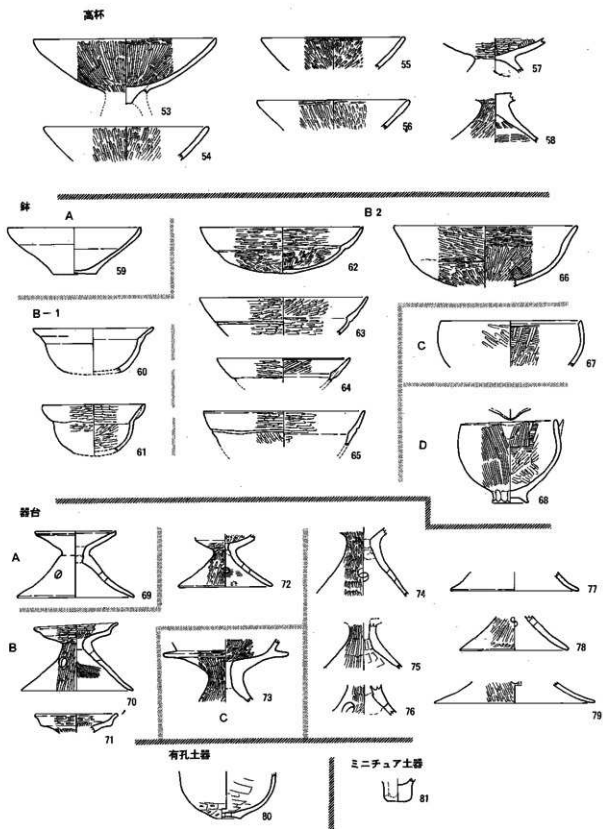


図38 古墳時代の土器 3 1 : 4

(8) ミニチュア土器

81の一点のみである。指頭による整形で、粗い砂を胎土に含み、やや軟質である。色調は淡い茶色を呈する。

(9) 小括

今回の調査によって出土した古墳時代前期の土器について編年の位置等について触れることとした。前項では各器種別に分類して説明を加えたが、これらの土器について東海・北陸地域とも比較を行いながら検討してみたい。

壺 大きくAからCまで三分類し、さらに細分した類もある。A類は口縁形態により有段口縁を持つものを一括しているが、その形態は一様ではない。A-1は広義の二重口縁壺で、外面調整はタテ方向のミガキが主体である。口縁形態は強く外反するもの(図36-1)とはほぼ直線的となるもの(2)とがある。こうした二重口縁壺は、畿内もしくはその周辺に系譜が求められ、東海西部では廻間Ⅲ式(赤塚 1990)の段階に現れる。また、北陸地方においては漆町遺跡で壺C類としたもので、その編年の位置については漆7群もしくは8群に位置付けられている(田嶋 1986)。A-3とした棒状浮文で加飾される有段口縁壺は、いわゆる東海系のバラススタイル壺に類似している。ただし、擬凹線文が施されなかったり、口縁形態が相違するなどかなり変化した形態となっている。こうした土器の類例は、北陸漆町遺跡壺F類とした形態に類似している。編年的には漆7・8群土器に比定されている。C類土器は、内湾長頸壺もしくは直口壺といわれるもので、畿内・東海系の土器であろう。特にC-1類とした流線的な口縁形態から外反する器形は、東海廻間遺跡壺D₁類とされたものの範疇に入り、東海地方では廻間Ⅱ式後半には成立する可能性があると考えられている(赤塚 前掲)。

甕 「く」の字状、「こ」の字状口縁甕が出土しているが、特徴的な土器が少なく、編年的な比較対照は難しいが、多くは北陸系の「く」の字甕であろう。

高坏 全体のわかる遺物の出土はないが、坏部がやや内湾気味に開き、脚部が八の字状に広がる形態を呈する。畿内系もしくは東海系の系譜と考えられる。

鉢 種類が多い。A類は内湾気味に開く体部と口縁を持つもので、底部は平底である。漆町遺跡C類に類似し、時期の新しいものは丸底化するし、体部も強く内湾するといわれる(田嶋 前掲)。編年的には漆6群に位置付けられている。B類は有段縁を一括したもので、B-1は深く丸い体部と、「く」の字に屈曲し外反ないし直線的に伸びる口縁部を持つものである。B-2類は精製化した丸底土器で、ヨコを主体とした細かいミガキが顕著である。器形的には、口縁部先端が緩く屈曲して内湾気味に開くものが主体的であり、北陸漆町遺跡のJ類、東海廻間遺跡のB₁類に類似する。漆町編年では7群以降に出現し、廻間遺跡では7・8段階の廻間Ⅲ式の1・2段階に出現する。なお、C・D類土器は内湾する鉢で、畿内・東海・北陸にも散見するが、その系譜については留保しておきたい。

器台 A～Cに三分類し、それぞれ口縁部が直線的で脚部が大きく外反するもの、外反する有段口縁を持つもの、結合器台のものとした。A・B類は、脚部が受部を大きく凌駕するタイプで、A類は東海廻間Ⅱ式以降に出現するが、脚が内湾せずに大きく開く器形はⅢ式より見られるものである。また、B類は畿内布留式にも見られるが、廻間遺跡ではB₁としたもので、廻間Ⅲ式より出現するものである。なお、C類とした結合器台は、北陸系の裝飾器台の系譜上にあるものと理解されるが、裝飾が喪失しており時間的な隔たりを感じる。

さて、以上北陸、東海地方と比較して時間的な位置付けを試みた。須ヶヶ峯遺跡の編年の位置につ

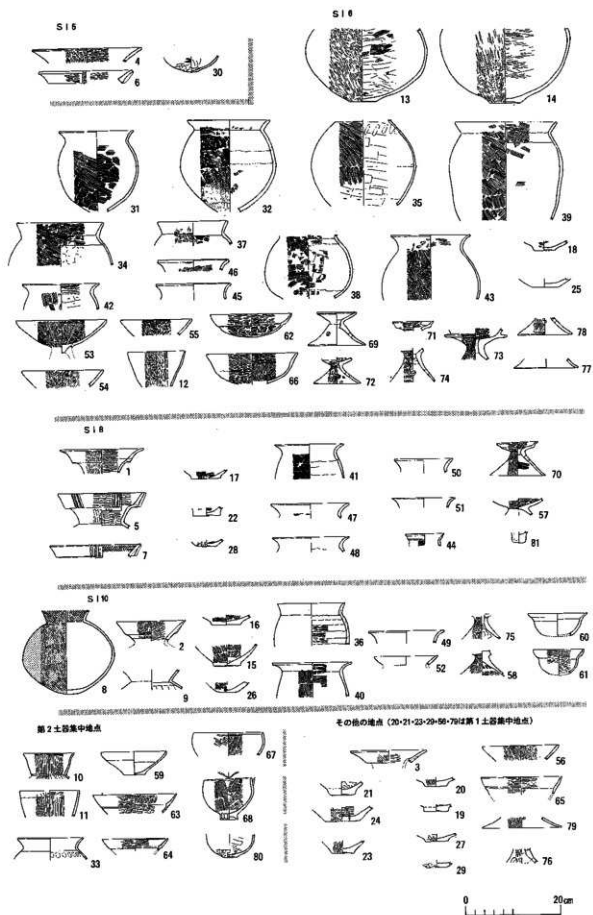


図39 古墳時代の土器 遺構別一覧 1 : 8

いては、すでに指摘してきたように東海濃尾平野では廻間Ⅲ式期に、北陸西部では漆7・8群にそれぞれ比定されるものと思われる。廻間Ⅲ式および漆7・8群土器については、表4のように年代がほぼ一致しているので、須多ヶ峯遺跡の出土土器の編年的位置も双方で矛盾しない。

なお、遺構別では6号竪穴住居址と8号竪穴住居址で比較的多くの遺物が出土している。精製化した鉢の存否からは8号住居址の方が古く感じるが、8号住居址のセット関係が十分でないこと、有稜器台などは両方より出土していること等により大きな時間差を認めることはできない。多少の時間幅はあるかもしれないが、北陸漆町編年の7・8群併行期に位置付けておきたい。

なお、本遺跡からはいわゆるS字状口縁甕が一点も出土しなかった。これについては赤塚氏が中野地方について指摘するように、赤塚氏のいう東海系の第2次拡散の波をほとんど受けなかったことが、この飯山地方でも同様と言えるのではないかと考えられるのである。土器の各個体には東海系の影響を受けた土器が見られるものの東海系土器そのものではないということからも、直接東海地方から流入したのではなく、北陸系との強い結びつきの中で生まれたものであろうと考えられる。多くの文献に文献に目を通すことなく極めて現象的な評価に終始してしまったが、今後とも該期土器について研究を深めたい。

表4 編年対象表

須多ヶ峯遺跡 (飯山市の遺跡)	北信濃(赤塚 1994) 七瀬遺跡		北陸(田嶋 1986) 漆町遺跡	東海(赤塚 1990) 廻間遺跡	畿内(石野・関川) 纏向遺跡		
(上野遺跡9号住) (柳町遺跡1号溝址)	第1段階	第3号住	法 仏				
	第2段階 (古)	第4号住	月 影	漆町3	廻間Ⅰ式	1	纏向1
		第13号住				2	
	第2段階 (新)	第14号住		漆町4		3	纏向2
						4	
	第3段階	第16号住	白 江	漆町5	廻間Ⅱ式	1	纏向3
				漆町6		2	
		第17号住		3			
	須多ヶ峯遺跡6・8号住			漆町7	廻間Ⅲ式	1	纏向4
				漆町8		2	
			漆町9	3			
				4			

赤塚次郎 1990 および赤塚 1994 を引用して作成。

赤塚 仁 1994 『弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相』「県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書—長野県中野市内—栗林遺跡 七瀬遺跡」(財)長野県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 1990 『考察』「廻間遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

石野博信・関川尚功 『纏向遺跡』

田嶋明人 1986 『考察』「漆町遺跡Ⅰ」石川県立埋蔵文化財センター

B 石製品

古墳時代の石製品は、堅穴住居址等から出土した砥石、使用痕のある礮（敲石）がある（図40）。以下に説明を加える。

（1） 砥石

2点出土している。1はS I 10より出土したもので、破損しているが現存長3.7cm、幅2.0cm、厚さ1.5cmを測る。2はII区K-12より出土。破損しているが、現存長5.1cm、幅3.0cm、厚さ1.9cmを測る。1・2とも仕上げ砥である。

（2） 敲石

5点出土している。3はS I 8より出土したもので、拳大の大きさで、長さ9.4cm、幅6.9cm、厚さ5.9cm、重さ488.1gを測る。4もS I 8より出土しており、扁平な形態をしている。長さ16.4cm、幅8.3cm、厚さ3.5cm 重さ694.0gを測る。両端に敲打痕が認められる。5はS I 10より出土したもので破損している。現存長10.3cm、幅7.3cm、厚さ5.9cm、重さ598.4gを測る。片側に敲打痕がある。6はS I 10より出土している。長さ12.4cm、幅7.5cm、厚さ6.1cm、重さ852.0gを測る。両端に敲打痕がある。7はS I 10より出土している。長さ13.3cm、幅7.3cm、厚さ7.0cm、重さ970.1gを測る。使用痕は認められない。

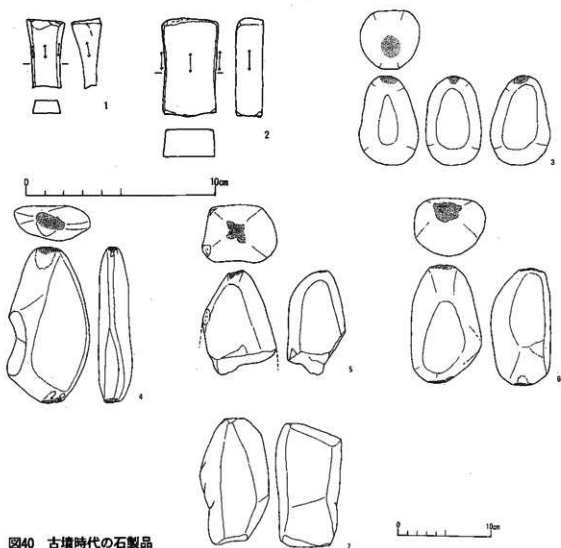


図40 古墳時代の石製品

第5章 ま と め

須多ヶ峯遺跡は、北信濃北端の穀倉地である外様平の南端を画する須多ヶ峯台地に存在する。須多ヶ峯台地は、ほぼ北方に向かって傾斜し、末端面は断層崖となって外様平に接している。

この須多ヶ峯台地上に遺跡が発見されたのは、昭和20年代後半である。当時、飯山中学校の生徒であった神田正人氏が、弥生式後期の土器を採集したことにはじまる。この当時は「ガニ沢上遺跡」として登録されている。このことについては、第2章2で述べたとおりである。須多ヶ峯遺跡が注目されるにいたったのは、神田正人氏が遺跡を発見してから十数年経た昭和40年のことであった。当時、桑畑であった台地傾斜面のほぼ中腹近くを中心として、宅地造成工事が行われた。その所に方形周溝墓2基が発見された。これが須多ヶ峯遺跡が注目される契機となった。このことについてもすでに触れているとおりである。

昭和40年代後半、藤ノ木の民宿経営者であった小湊清彦氏が、須多ヶ峯台地西縁の所有畑をテニスコートに造成した所に縄文中期の土器や住居址が発見されたようである。たまたま、須多ヶ峯台地の遺跡分布図調査を行った筆者は、テニスコート造成のために台地をカッティングした場所において、縄文中期の土器を採集した。そして、カッティング面をよく見ると焼土や落ち込みが看取された。この発見によって、台地の西縁にも遺跡が広がっていることが判明したのである。詳しくは記憶にないが、昭和50年夏頃であった。

今回の調査は、須多ヶ峯台地傾斜面の高位部分が対象となった。調査対象地の西縁部分は、新たに発見された縄文中期遺跡の北端部にあたっている。

今回の調査でもいくつかの大きな成果が得られた。それ等の成果について簡に触れて、“まとめ”としたい。縄文時代についてみると、発見された遺跡は、縄文中期の竪穴住居址2軒と土坑17基である。竪穴住居址2軒は、7号住居址、9号住居址とそれぞれ命名された。この2軒の竪穴住居址は、表土がきわめて浅く、後世の攪乱を受けており、明確なプラン検出は不可能であった。しかし、発掘の所見からすると9号住居址は、相当大型の住居址であったと推定されている。次に土坑について触れよう。発見された17基の土坑内からの出土遺物はほとんど皆無であった。形態等から縄文中期の落とし穴と考えてよいと思われる。

次に出土遺物についてみよう。遺物は、大半が7号住居址内から発見されている。

土器は、縄文中期前葉を中心としている。破壊の度合いが甚だしいので完形土器はない。石器は、磨製石斧、打製石斧、石鏃、凹石、敲石、磨石等があり、縄文中期に一般的にみられるものである。

次に古墳時代についてみよう。古墳時代の遺構は、住居址4軒、掘立柱建物址2棟である。住居址4軒は、5号、6号、8号、10号住居址とそれぞれ命名されている。この内、5号住居址と8号住居址は、大形の住居址である。それに比べて6号住居址は小形である。発見された4軒の住居址は当地域では珍しく壁がきちんと掘り込まれ、見事な住居址であった。今回の発見で、須多ヶ峯台地上で古墳時代前期の住居址は合計8軒となる。未調査地域や破壊された地域を含めると10数軒存在したものと考えられる。当地域の古墳時代前期の集落構成を考える上で、貴重な資料といえよう。次に掘立柱建物址は2棟発見されている。この内1号掘立柱建物址は、8号住居址、10号住居址のいずれかに所属するものと考えられている。

次に出土遺物についてみよう。出土遺物は、土師器がほとんどである。今回出土した土師器は、いずれも古墳時代前期に所属するものである。甕、壺、高杯、鉢、器台と一応の器種がそろっている。小括の頃で望月が編年の位置について触れているので重複はさけるが、出土土器は北陸漆町7・8群に位置づけられ、柳町遺跡1号溝址内出土土器との間には若干のヒアタスが存在するものと考えている。従って、今後

柳町遺跡1号溝址内出土土器との間隙を埋める時期の土器究明が、重要課題の一つといえよう。更には、柳町遺跡1号溝址内出土土器及び上野遺跡出土土器以前の土器究明もまた重要であろう。

北陸地方、東海地方との比較検討を通していえることは、当地域では現在の所、弥生時代終末から古墳時代初頭の土器群は明確でない。果たして、弥生後期箱清水式土器がどのような経緯をたどって古墳時代前期の土器へと移行していくのだろうか。この点についても今後の課題といえよう。

いずれにしても、今回発見された古墳時代前期の土器は、当地域の古墳時代前期文化を研究する上で極めて貴重な資料といえよう。

昨年夏はまさに異常気象であった。酷暑の中、汗だくになりながら懸命に協力下さった作業の皆さんに衷心より感謝申し上げます。

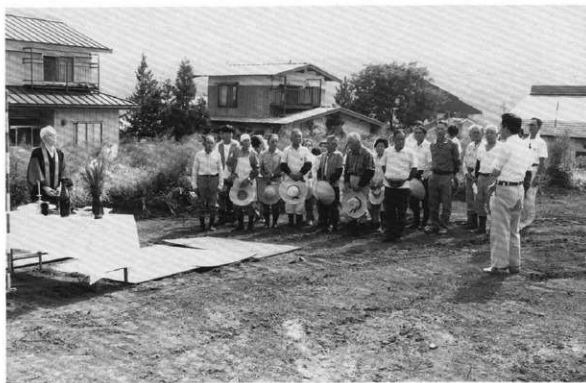
PLATE



須多ヶ峯遺跡航空写真（上が北）



須多ヶ峯遺跡遠景（北から）



開始式（8月1日）



表土 後方須多ヶ峯団地（西から）



I 区 全 景 （東から）



Ⅱ区全景（東から）

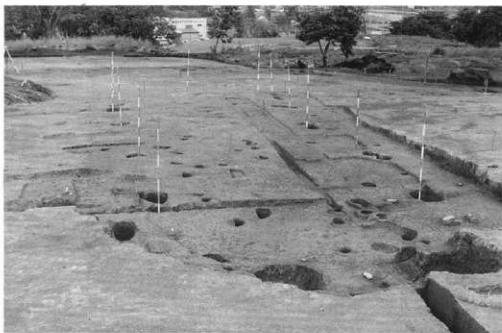


◀ 西の大谷の調査風景

古墳時代家屋の復元作業▶
（現地見学会を前に、
S I 2の上に）



7号壑穴住居址▶
(S I 7) 南から



◀ S I 7 上面輪郭
南から

S I 7 南端部の遺物▶
出土状況
(手前右 深鉢が出土)





◀ 深鉢の出土状況
(S17) 南から

S17P6の西側 ▶
で出土した磨製石
斧(下)とくほみ
石(上)



◀ 9号竪穴住居址
(S19)
南から

5号竪穴住居址▶
(S I 5) 東から



◀ 6号竪穴住居址の掘り下げ作業
北から

▼ 6号竪穴住居址 (S I 6) 西から





◀ 6号竪穴住居址
(SI 6) 西から

6号竪穴住居址遺物 ▶
出土状況 (SI 6)
南から



◀ 壺底部の出土状況
(SI 6P6)
北東から



並列して検出された建物址 北から
(手前からS I 10、S B 1、S I 8)



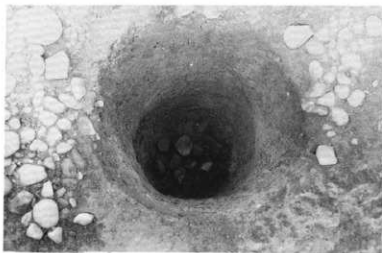
8号竪穴住居址(S I 8) 西から



◀ 壺口縁部出土状況
北から
(S18東隅から)



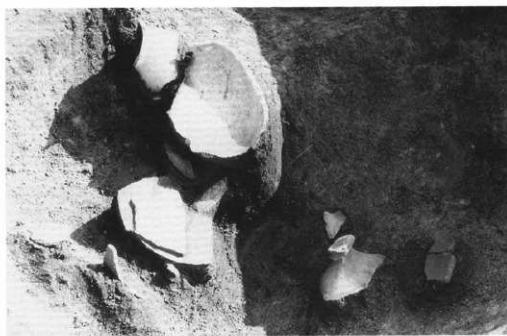
◀ P6周囲の礎床出土
状況 北から
(S18)



◀ P6内の礎の状況
南から



10号竪穴住居址（S I 10） 西から
（溝状の攪乱をうけている。）



S I 10P 5 の壺と器台の出土状況 西から



◀ 1号掘立柱建物址
東から
(溝状に攪乱を受けている。)
右上方は、S I 10



◀ 第1土器集中地点の出土
状況 北から



◀ 第2土器集中地点の出土
状況 北から



▲ 土坑第1の列 東から
(手前から7号、8号、9号土坑)



▲ 7号土坑 (SK7)



▲ 8号土坑 (SK8)



◀ 9号土坑 (SK9)



◀ 土坑第2の列 東から
(手前から5号、6号、4号、3号、1号土坑)

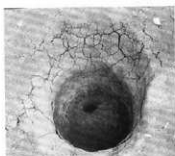


▲ 1号土坑 (SK1)

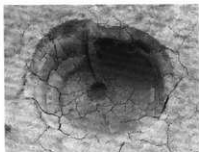


▲ 3号土坑 (SK3)

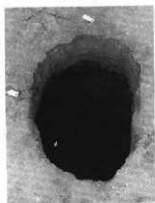
PL 14



◀ 2号土坑
(SK 2)



◀ 10号土坑
(SK 10)



▲ 土坑第3の列
の12号土坑
(SK 12)



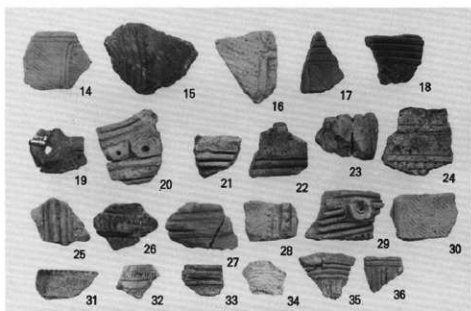
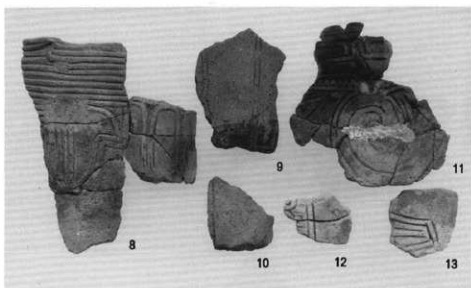
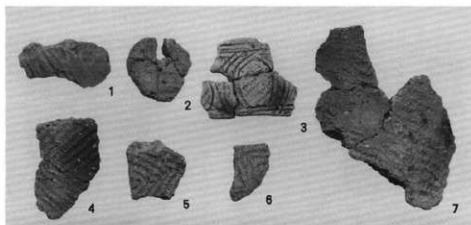
▲ 15号土坑
(SK 15)



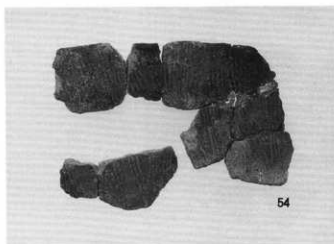
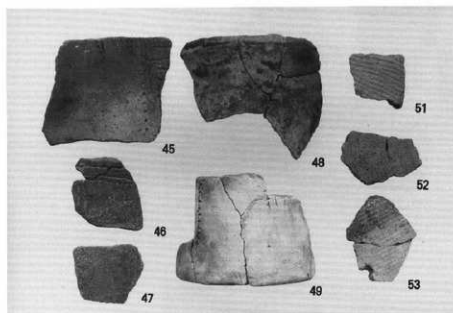
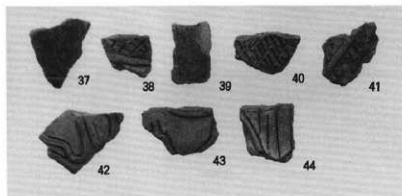
◀ 17号土坑
(SK 17)



須多ヶ峯遺跡発掘調査に参加されたみなさん

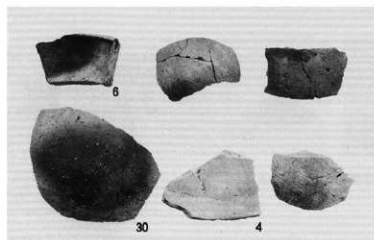


縄文時代の土器

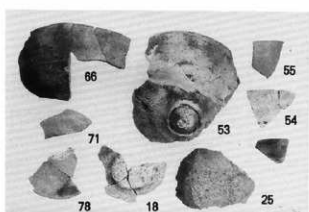
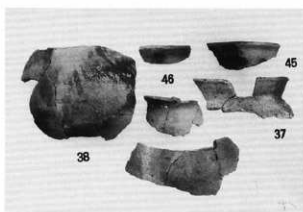


縄文時代の土器(2)・土製品

▲ S17P5から出土したミニチュア土製品



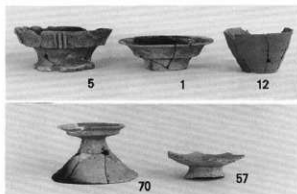
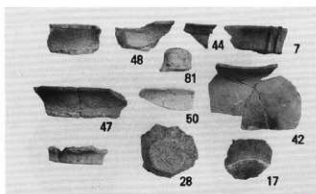
◀ 5号竖穴住居址出土土器



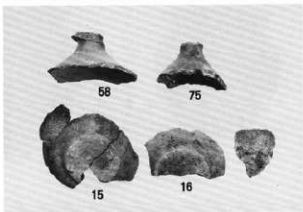
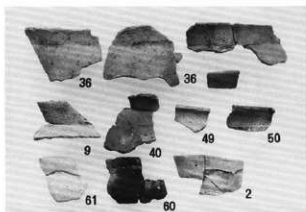
▲ 6号竖穴住居址出土土器



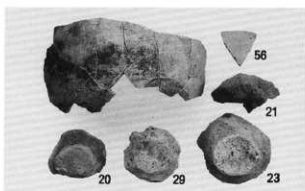
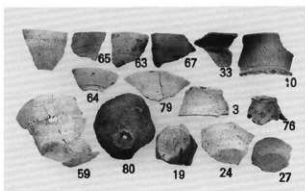
▲ 6号竖穴住居址出土土器



▲ 8号竖穴住居址出土土器



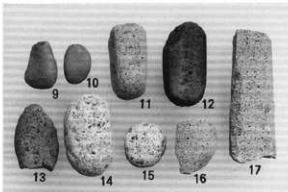
▲ 10号竖穴住居址出土土器



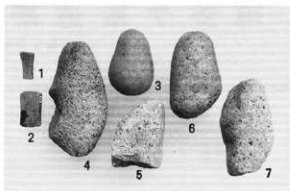
▲ その他の地点出土土器



▲ 第2土器集中
◀ 地点出土土器



▲ 縄文時代の石器



▲ 古墳時代の石製品

飯山市埋蔵文化財調査報告 第47集

須多ヶ峯遺跡

平成7年3月発行

編集・発行 長野県飯山市教育委員会
長野県飯山市大字飯山1,110-1
印刷 榑足立印刷所

